

弄花抄の基礎的資料稿

森 一郎

弄花抄、一葉抄、細流抄、明星抄、孟津抄を中心として、さかのぼっては河海抄、花鳥余情、下っては岷江入楚を視野の中におさめた、室町時代の三条西家の源氏学のいわゆる鑑賞批評的研究の展開をあとづけるにあたり、その基礎的調査の一端をここに活字化する。

広島大学国文学研究室蔵全七冊の「源語弄花抄」（平瀬家旧蔵本）と神宮文庫蔵の「源氏物語抄」（弄花抄）との校合を報告するが、広島大学国文学研究室蔵の「源語弄花抄」は伊井春樹氏翻刻の「翻刻平安文学資料稿」（広島平安文学研究会発行）による。平瀬家旧蔵本弄花抄を底本として傍に校異を施しておく。校合の巻は、神宮文庫本に欠けているものなどをぞいだ。また与えられた紙幅の制限のため本紀要には、桐壺、帚木、空蟬、夕顔、若紫、末摘花、紅葉賀、花宴、葵を載せ、以降の巻は「甲南国文」（第18号、昭和四十六年二月）に載せる。

源語弄花抄一

光源氏年次

- 桐壺巻自誕生至十二歳 ナシ 卷末有送年之意 ナシ 講談日数 ナシ 二日
- 帚木十六歳三日 ナシ 空蟬同一日 ナシ 夕顔同至十月三日 若紫十七歳三日自三月至冬 ナシ 末摘花七十八歳春事 ナシ 紅葉賀 ナシ 十七八 冷証(朱)
- 歳至七月立后 ナシ 末詞有経月日之心 ナシ 二日 ナシ 花鳥有云々 ナシ 十月(朱)
- 花宴十九歳一日 ナシ 葵廿二歳廿歳事両卷間在之三日 ナシ 柳廿二三四歳 冷五(朱) 至六月三日 ナシ 花散里 ナシ 廿四歳五月 須磨廿五六歳三日 ナシ
- 明石廿六七<至秋二日 ナシ 水尾尽廿七八二日 澤 深 蓬生廿七八末 ナシ
- 詞有送年之意 ナシ 関屋廿八歳九月二日 一オV絵合卅歳三月廿 日(朱) 九歳事可在 ナシ
- 両卷之間但此卷斎宮女御入内可為廿九歳之冬欵云々 ナシ 松風卅歳 ナシ
- 三日 薄雲卅(朱) 卅一至秋二日 ナシ 權卅一至冬二日或一日 ナシ

乙女卅二至卅四歳三日 玉鬘卅五二日 初音卅六正月一日胡蝶同年自三月至夏二日 螢同年五月二日或一日 常夏同年六月 篝火同初秋三日 野分同秋一日 行幸同十二月ヨリ卅七月 二月マテ二日 蘭卅七八九月一日 真木柱 卅六冬ヨリ至卅八日 梅枝卅九春一日或二日 藤裏葉 卅九自三月至十月二日 若菜上卅九ヨリ至四十一 五日或六日ミノ紙大字一日 七十廿五六枚宛 同下四十一三月ヨリ至四十七 日十七日五日 一ウ ヲ 柏木四十八春ヨリ至秋 横笛四十九薰二歳卅三丁一日 鈴虫五十 十八丁一日或及夕霧 夕霧五十八十二丁四日或三日 御法五十一春ヨリ至秋冬歇卅廿四丁一日 幻五十二年中薰五歳廿五丁一日 雲隠 匂宮 薰十四歳ヨリ至十九幸相中将至廿歳春賭弓事歇十七丁一日 紅梅薰中納言十七丁一日 竹河薰四位侍従末中納言五十三丁三日或以上三帖合ナシ 四日

宇 治

ウハソクノ宮京ニテノ事ヨリアリ薰^{花傳二十六卷中納言ヨリ至六知何}ハ十九歳幸相ノ年ヨリ 橋姫リ廿一歳ニ至ル歇匂宮卷ヨリノ混乱難決之処多之別註之 『椎本四十四丁二日 総角百三丁四日或五日 八二オ ヲ 早藤

(11)

廿一丁一日 宿木百丁四日或五日 東屋七十七丁三日 浮舟七十七丁三日 蜻蛉七十二丁三日 手習八十三丁三日或四日 夢浮橋廿二丁一日

宇治廿六度七八度〔内神宮文〕
庫本にナシ

私^{ナシ}采花物語第五 浦くくの別長徳二年事也

伊周云千時内大臣左迁事 御とした廿二三はかりにて御かたちとのほりふとりきよけに色あひまことにめてたしかの光源氏もかくやありけん^{奉るナシ}と見んするハニウ同八はつ花寛弘五九十一後一条誕生^{五夜采}く行成卿書^{千代}和哥序めつらしきひかりさしそふ盃はもちなからこそ干世をめぐらめとそむらさきさゝめきおもふニ^に四条大納言すのもとにゐたまへればうたよりもいひいてんほとこのこはつかひはつかしさをそおもふへかめる

首書云此式部従一位倫子家女房越後守為時女母常陸介為信女作源氏物語中紫卷仍号紫云々

同卷 寛弘七 尚侍妍子入東宮事

中宮のまいらせ給^其くしおりこそかやく藤つほとよの人申けれこの御まいりまねふへきかたなし

。源氏物語聞書、或說并料簡加之、ハ三オV

作者

。紫式部藤為時女作也、或說見河海抄抄花鳥余情等

。作意

大齋院選子村上、所望上東門院一条院后宮、之時式部即作進之

云々、用連連、用、意平詣石山寺得趣、朱、向之由見河海抄但翻般若書在經起云々

之說無夷乎

。大意者君臣父子夫婦朋友之道以教人也、関雎之德可見又摸莊子寓言更有一字褒貶凡明盛者必衰、衰者定離之理而已

。或說云一部之作意比天台四教法門云々

。時代寬弘初造出之康和流布特五条三品京極黃門之ハ三

ウV比賞翫云々、從寬弘迄文明十年四百八十餘歲也

。諸本不同、草書中書清書有差乎不可限青表紙河内守流兩本也、俊成卿父子之本猶有異云々、可有料簡欵

。題号全朱、金篇以光源氏君為詮、故号源氏（朱）ナシ

。源氏姓、始テ嵯峨御子信公、見河海マコト抄

。源字者濫觴小水為九河之源之義、說而用之也、此物語亦含

其理仍累世握翫不絶也、又水源有口決一說

。准拋

桐壺帝准醍醐天皇以下見河海抄ナシ貴聖代之故延喜為取初也

光源氏雖准西宮左府高明公西酉、而西周源氏源氏、而又周公東征管家在中

將沈淪等、并比之不摸一樣、用捨隨宜也、ハ四オV

仁明御子源光右大臣正二氏

。光君密通女御等之事、准在羽林好色粗相似乎

。古來称美

古人各不可説云々、順徳院御記等見花鳥、我國の至宝は

源氏の物語ニ過たるはなかるへし云々、定家卿閑談之説

別記く之ハ四ウV

桐壺

此卷始テ桐壺更衣之故為卷名也、凡就卷名有四意、准天

台四諦法門之由見干花鳥ナシ

此卷中源氏君從誕生至十二歲也、此卷の末の

詞におとなに成給て後とあり十二歳より後の心こ

もるへしされは帚木の巻は十六歳也兩巻の中間にてニテ年を送る事末の巻にも此たくひあり

1 いつれのおほんときにか(五1・27)此発端の辞甚深にしてあまたの理を含めり先作者をあらはさずしてき

ゝつたへたる事をかきをきたる物にみせ侍りされは巻

の終の詞にも其趣みえたり作者あらはれされは傍人の

難をおはさる故也ことに紫式部かハ五オV比女房にも

才ある人ある人おほかりきそのはゝかりもあるにやい

ふものはつみなきさまにかまへたるなるへし伊勢集の

初の詞同之意通する歎又此辞ニ一の深意あり秘説也

2 女女御更衣(五1・27)詳河海本説官職等注諸抄之条ナレ略也女御は無位以上至二位三位也更衣は女官の名也一条禪閣御注

3 はしめより我はとおもひあかりたまへる(五2・27)

問之更衣と御息所と差別有如何一注更衣ハ母官ノ名也

御息所は房の名也同事ヲ云カヘタル也但東宮ノ女御ヲ

も御息所ト云也此詞より上中下の性を褒貶したる心あ

り上臈はものえんしなとは大やうなるへし殊勝なる

ことは也みる人可恥也

4 それより下らうの更衣たちは(五3・27)ましてやす

からすとある詞にて下らうの性みえたる也ハ五ウV

5 うらみをおふつもりにや有介舞(五4・27)人のうらみを

おひぬればくるしき事あるならひしるへし

6 あつしく(五5・27)つもし文字すみてよむへし一注

7 あいなく(五7・27)あはきなき心也或説愛もなき也

意は通する歎

8 まはゆき(五8・27)善悪ニ通する辞也正体にむかは

ぬ心あり

9 もろこしにもかゝることのおこりにこそ(五8・27)

殷イシノチヲツキ紂チ姐シ己キを愛し周幽王褒姒を寵せしより世の乱たる事

等をひきて云り次の辞ニやうきひのためしもひきいて

つへうとは貴妃のためしまてト朱ナレいふこと也花鳥ニハ以

上貴妃事云々おこりは起と驕オ(オ)ヲ(オ)ル(オ)と兩説あり起はきよる

しきにや

10 はゝきたのかたなん(五12・28)母北のかたなんよし

あるにてと句をきりておや打くしハ六オVさしあたり

と世の人のことをいふにてやすらかにきこゆるにや

11 一のみこは(六4・28)朱雀院と申せし御事也見系図

12 よせをもく(六4・28)よせは縁世をもくしき人あ

- るなり私寄重敏^{ナシ}
- 13 をしなへてのうへ宮つかへし給へき(六7・28) 詳花
- 14 上すめかし(六8・28) 上臈しきさま也末のことはに
も心はせのなたらかめにやすくにくみかたかりしなと
恋きこゆるよしあり
- 15 御つほねはきりつほ也(七3・29) 桐壺清涼殿の良也
其間殿ミ隔たり
- 16 うちはし(七6・29) 渡殿のきりめん^左くらうにいたを
わたしてかよふをいふ也一注
- 17 こうらう殿(七10・29) 花鳥^ニ見たり
- 18 曹司(七10・29) さうしにこりてよむへし一注
ハ六ウV
- 19 五六日(八5・30) いつかむいかとよむへし又字のま
よむ人もあり
- 20 なくくそうしてまかてさせ給(八6・30) 退出のや
うを書て次^の詞にはいまた宮中にてのことあり此文体
所く^ノにあり
- 21 ことにいてよもきこえやらす(八10・30)
此詞ことにははれ也云々余情を思ふへし
- 22 てくるまのせんし(八14・31) 私車抄云古人談讃岐院
御位ヲ避^テ令^テ出内裏給ニ寄御手車寄例車給ニ寄^{タリ}
^{牛(朱)} ^{ナシ} ^{横(朱)} ^{ナシ} ^{たり} ^{寄(朱)}
- ケレハセハクテ無可乗用之様ければ令猶預けるほとに^ハ
- 法性寺殿令參給手車ヲハそハをこそよすれと被申たり
ける時ソハをよせたりけれハ広クテ令奉給てけり不知^ト
- 子細ハ令猶預たるハウハ七オ^ウルセカリケリ乗ラント^{らんとし}
シ給ハ、見苦カリ^{かり}なんト有御定ケル手車ハ輪のちいさ^{ける}
くてそはの広て前はせハキ物ナリ^{はきなり}詳花鳥和秘抄一禪作
- こしにわを^{テ(朱)ナシ}かけて手してひくことをいふ^{車(朱)ナシ}
- 23 かきりとてわかるよ(九3・31) 更衣のときにそみ
て心中を有のまよよめる殊哀あり云々
- 24 いとかくおもふ給へましかはと(九3・31) 此語尤感
あり云々かねてよろつにたのみし心のほかになりぬる
ことをおもふ詞也世上もみな如此なるへし花鳥義別也
- 25 けふはしむへきいのりとも(九6・31) 更衣の里にて
修法はしむへき故に退出をゆるし給也ハ七ウV是もふ
かく思召によりて也
- 26 かゝるほとにさふらひ給れいなき事なれば(九12・
32) 花鳥にくはし猶秘決あり
- 27 なにことかあらんともおほしたらす(九12・32) 光君
のいときなき心をいへり此さまことにははれなり
- 28 よろしきことにたに(九14・32) 大かたの人の別たに

かなしきならひなるをと也

29 むなしき御からをはいに成給はん(一〇五・32)

右哥の詞にてかけると云々在河海但さしあたりての心にて無子細歎

30 三位のくらゐ(一〇八・33) みつのくらゐとよむへきにや或本ニハおほきみつの位とあり和秘抄ニ正三位の事也云々

31 いま一きさみをたにとをくらせ給也けり(一〇一〇・33)

ハ八オV女御とたにいはせぬと仰ありし心也なり

けりとはそのいはれを尽したる詞也所々ニ此類あり

32 心はせのなたらかに(一〇一〇・33) 前の詞にかなへり

33 なくてそとは(一〇一四・33) 引哥在河

34 したしき女房御めのとなとをつかはして(一一一六・33)

この後に又ゆけいの命婦をつかはされし也

35 野分く。ちて(一一一七・34) 哀なる折節なるへし

36 はくさむき(一一一七・34) 将の字の心なるへし一禪同

之間肌のさむき歎将の字歎秋風のやゝはたさむくな

とよめるも将の心にや云々又といふ義歎まさにと云心

にもや又はたへのさむき心にも。やにはかにといへる

ニ叶歎

37 ゆけいの命婦(一一一八・34) 在花鳥ハ八ウV

38 やみのうつゝにはなをとりけり(一一一二・34)

引哥在河本哥の心はやみのうつゝは夢にもまさらぬとはかなき事也いまのおも影の幽なるは又やみのうつゝにも猶をとりけりといへり

39 野分にいとゝあれたる心ちして(一一二一・34) みかき

つくりたりし所のほともなくあれたる心ちすと也

40 八重むくらにもさはらす(一一二二・34) 引哥在河くる

春はとあるを月にかへてかける也

41 ないしのすけ(一一二五・34)

42 ほとへはすこし(一一二四・35) 勅書の御詞也

43 宮城野の露吹むすふ(一一三五・36) 見花鳥

44 松のおもはん(一一三六・36) 引哥在河

45 くれまとふ心のやみも(一一三六・36) 子をおもふみち

を云り更衣の母詞也ハ九オV

46 よこさまなるやうにて(一一四九・37) 人のそねみなど

つもりてうせぬれば横死のことくおもへり

47 人の心をまけたることはあらしと(一一四一三・37)

聖王の御心つかひ殊勝也但女事にいたりては乱給し御

事もましますならひ也

48 虫の声くもよほしかほなる(一一五五・38) あはれを

催す也

49 すゝむしの声のかきりを(一一五七・38) 声を尽しても

ニくはしくみえたり大しやう子のをものはまさしくき
こしめしける事ある御膳なれば御覽しも入ぬ由也

66 此御ことにふれたることをは(一八13・42)

余の事は正路なりし心みえたり

67 たいくしき(一九1・42)たえくしき也 和抄

68 ひとの御かとのためしまて(一九1・42)見河ハ一
オV

69 坊さたまりたまふ(一九3・42)朱雀院御事也此とき

また坊にておはしけるか辞して先坊と申へし櫛の巻ニ

六条御息所の詞にてみえたり此時分現存とみゆ延喜皇

太子文彦早世しましくき此物語の先坊ニ比すへきに

や又三条院御子小一条院は春宮を辞して太上天皇ニな

り給云々此ものかたり以後の事なりといへとも如此例

ある事を注也

70 かかりこそありけれど(一九6・42)光君は寵愛にて

ましませとも順義にまかせおはします事殊勝の儀也

71 世人も(一九6・42)よの人もとよむへし云々和抄

72 御ふみはしめ(一九11・43)在花鳥

73 宇多の御門のくいましめ(二〇7・43)見河海花鳥等

74 こうろくはん(二〇8・44)見花鳥七条朱雀ニアリ

和抄ハ一ウV

75 右大弁の子のやうに(二〇9・44)うつほの物語にも
如此事あり

76 又そのさうたかふへし(二〇12・44)大やけのかため

と成給なは乱れふる事の相はたかふへしと相しける

にや 花鳥には大やけのかためと成たまふへき相とみ

れは又つゝるに太上天皇の号をえたたまへる故にその相た

かふといふ云々浄梵王太子誕生之時阿私多仙人奉相之
語甚相似也

77 弁もいとさへかしこき(二〇13・44)才さの字清濁如

何一禅合点右大弁も才ある人也

78 いみしきをくりものとも(二一3・44)むめかえの巻

ニ此物の沙汰あり

79 やまとさう(二一6・44)見花鳥

80 よせなき(二一8・44)無縁也

81 すくようの(二一12・45)宿曜道北斗道の法師也

和抄ハ一ニオV

82 いよくみちくの(二一10・45)天下をたすくへき

人は転学なくてはあしかるへきよしみえたり

無学行政如無燭夜行と云々 人不学不知道とも
レ(朱)レ(朱)二(朱)レ(朱)一(朱)レ(朱)レ(朱)レ(朱)

いへり

83 先帝の四宮(二二四・45) 此先帝いかゝ花朱雀院行幸

は字多御門に比すへき歎^也云々

84 三代の宮つかへに(二二六・45) たゝ久しくつかへたるといふ心可然歎

85 御かたち人(二二七・45) かたちよき人をいへり

86 御せうとの兵部卿のみこ(二二三・46) 紫上の父宮の事也

87 おほしなくさむやうなるもあはれなるわさなりけり

(二三五・46) 此詞尤余情ありあはれなる心也云々

88 打おとなひたまへるに(二三七・46) 女御たちなどのおとなひたまへる中に藤壺はわかとおはします也

二ウV

89 うへもかきりなき御思とちにて(二三三・47) 藤つほ

をも光君をも切におほしめす故^に被仰之心歎

90 なたかくおはする宮の(二四三・47) 弘徽殿の宮たちの事をいふ

91 かゝやく日の宮と(二四五・47) 見花鳥 栄花物語第

六ノ名カ、ヤク藤壺ト云^ク上東門院^{静子}御堂女^{十二ニテ入}

内事也御堂女 内之事也同ハツハナ 中宮のまいり給しおりこそかゝ

やく藤つほと世の人申けれ^は

92 おはします殿の(二四一〇・48) 詳花鳥

93 くわさの御さ(二四一一・48) くわんさとは元服する人

をいふ和抄元服以前之性を給りたまふへし有例^{に(朱)姓}

94 ひきいれの大^臣(二四一一・48) 加冠の人和抄ハ一三

オV

95 大蔵卿藏人(二四一三・48) 見花鳥

96 御そたてまつりかへて(二五二・48) 詳花鳥

97 みな人なみたおとし給(二五三・48) 源氏にて元服の儀式等春宮の^{△x}にはことかはりたるをみ奉る^{△x}一入^{△x}

あはれにおもひ御門もその御心のうち^{△x}なるへし 又た

彼さまを感じたるにや親王以下元服の時拜舞はみな

清涼殿の東庭にて御前へむきてあり東宮御元服は南殿

儀也それは堂上にて御拜^舞あり一注

98 春宮よりも御け色あるを(二五六・48) 榊の巻に此心

みえたり

99 さふらひにまかて給て(二五七・48) 見花鳥

100 内侍せんしうけ給はりて(二五九・49) 見花鳥

101 うへのみやうふ(二五九・49) 一注内命婦外命婦とて

あり内裏に祇候するを内命婦といふそれをうへの命婦

といふへし外命婦は臣下妻也ハ一三ウV

102 しろき大うちき(二五九・49) 榊は衣の事也それに大小あり小うちきは女房ならては着せぬ也色は定まらぬ

也一注

103 おほうちき(二五13・49) きぬのうへにきる物也和抄
おとゝは束帯直衣などにも大褂はかさぬる也たゝきぬ
の事也一注

104 大うちきの事 こうちきにたいして大褂と称す衣と各
別の物也衣よりはたけ長く候其色不定候織物もしは綾
也色はたゝ衣と同体也裁縫聊相替候―男の装束にも女

のにも共以用之衣と単とのあひたに着候物候

105 こうちきの事 これは女の宿装束とて唐衣を着せさる
ウハキ

時表着の上に唐衣の代に着候たけみしかく候よし承候

入内抄に分明也ハ一四オV此注者東山左府実熙公以書

被相尋嘉吉元三一条前摂政兼良公殿以令勘付給之文章写也

106 御さかつかきのつゐてに(二五14・49) 清涼殿見別たる
儀義とみゆナシにて(采)と(采)

義とみゆ

107 いときなきはつもとゆひに(二六1・49) 加冠の人に

仰らるゝゆへに如此

108 むすびつる(二六3・49) もとゆひによせてこきむら

さきとよめり又女を紫といへは也

109 なかはしよりおりて(二六4・49) 見花鳥
110 藏人所のたか(二六4・49) 詳花鳥 鷹藏人所の掌也

(10)

藏人所禁裏仙洞執柄大臣家にもあり殿上の次の間に布

障子をへたてゝ藏人所といふ也地下の者の候所也一注

111 みはしのもとにみこたちかんたちめつらねて禄とも

(二六5・49) 源氏君の元服に禄を給ふ事は東宮御元

服の時のハ一四ウV儀と表する也其時は諸卿ことゝ

く給ふ也一注

112 こもの(二六6・49) 見花鳥

113 とんしきろくのからひつ(二六7・49) 詳花鳥

禄辛櫃其例にあらされともことをそへさせ給よしを

いへり

114 女君はすこしすくし給へる(二六10・49) 葵上十六才

なるへし

115 このおとゝ(二六12・49) 左大臣関白なるへし

116 おとなに成給て後は(二七9・50) 花鳥見花鳥ニみゆはゝき

ゝの巻にては源氏十六歳とみゆ

117 おうなゝ(二七14・51) ねんころなる心也

118 おもふやうならん人を(二八4・51) 二の意ありたゝ

大かたおもふやうならん人をとおもひ給ふと又藤壺の

事を心にかけての詞也ハ一五オV
119 いつしかと心もとなからせ給くていそきまいらせて御

らんする(六二・28)問云源氏君生給て日数いか程をへて禁中にいり給へき哉一答日数は定まれる事なし皇子など御産ありてそのまゝ御乳父の所にまします事のみ也源氏君は別段の子也

120 みはしのもとにみこたちちかかんたちめつらねて禄ともしなくに給ふ(二六五・49)問云引入の大臣の外の人に禄を給る事も例ある歎 一答源氏の君の元服ニ禄を給ふ事は東宮御元服の時の儀を表する也其時は諸卿ととく給也八一五ウV

帚 木

源氏十六歳夏の事也有

卷の名事

あるにもあらずきゆるはゞきとよめる哥によて号せり此哥も是則ありとはみえてあはぬとよむ哥をもてよみたまへり帚木の事は抄物等ニ委はゞきといふ名は此物語の大意に相当せりありなしの理肝要也夢のうき橋の巻も同心也

又人間の事もみなはゞきの有無の理なるへし此巻は序文にあたるへし一部ニわたるへき心也きりのほの巻

は其前也

1 光源氏名のみことくしう(三五一・55)前巻の末詞をうけてかける也八一六オV名はことくしくて又い

ひけたれさせ給とヒも多かりといふ義は勿論也

2 しのひたるかくろへ事(三五二・55)源氏君の好色

は在中将などのふるまひこはかはりてうへは実をたてに(朱)下(朱)にすぎ給也

3 なよひかに(三五四・55)ひもしすみてよめり一禅は

ひ文字にこる歎云々一注云にこる歎

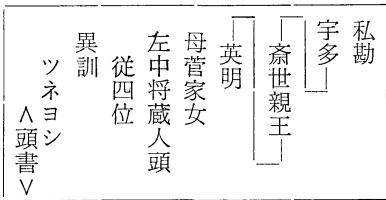
4 かたの少将(三五五・55)

古作物語の名にあり好色の人なるへしはしめより此詞まては紫式部か批判とみえたり

5 また中将などにものし給し(三五五・55)こより双紙の詞也

源氏君此時も中将也此物語ニハ過しことを書つたへたる心にてかくいへり八一六ウV

6 大殿(三五六・55)一禅勸大臣なる人をもおほ殿と



いへる所あり如何いつれにも通用したる詞也

7 なか雨はれまなきころ (三五〇・五五) 五月斗の事なるへし花鳥六月云々

8 をさき (三六三・五六) 花鳥ニくはし漸又頗也云々又

左伝ニハ治ト云治理政事也云々

9 宮はらの中将 (三五三・五六) 頭中将は桐壺御門の御いもうと三の宮の御はら也

10 心のうちにおもふことをもかくしあへす (三六五・

五六) 品定の物語あるへき故にかくかける

11 文ともなとみたまふ (三六七・五六) 書籍など御覧するおり也

12 かたはなるへきもこそ (三六九・五六) 下の心は興ある文をかくしたまふ心也

13 をのかし (三六一・五七) みつからの心さしのまゝなるをいへりハ一七オV

14 えんすれは (三六二・五七) うらむる心也えんすれは文共をかつくみせ給ふ心をいひのこしたるなるへし

15 女のこれはしもと難つくまじきは (三七六・五八)

頭中将の詞也是はと也モナシはやすめ字也

16 うはへのなさけにてはしりかき (三七七・五八) 手はしりかきとよむは不用也はしりかきすなはち手をかく事

也

17 まことのそのかたを (三七九・五八) 実ある事也すへて

男女に通して人の心つかひ善悪をみせしらしめんため
の物語也

18 おやなとたちそひ (三七二・五八) 一段也末摘私ニ思あはすへき歎

19 はつかしけなれば (三八三・五八) 頭中将のかゝることともをかたりてさすかにハ一七ウVはちらひたるてい
也

20 そのかたかとも (三八五・五九) 源しの詞

21 いときはかりならんむ (三八五・五九) 頭中将詞ナシ

22 とる方なく口おしきはといふなりとおほゆはかりと
(三八六・五九) 最下と最上とはその数ひとしくこそあらめと也

23 そのしなくや (三八二・五九) 源氏語也

24 もとの品たかく生ながら (三八二・五九) 源詞也一種也

25 又なを人の (三八三・五九) 又一種也種姓性たうとからぬ人なるへし一注

26 なるのほれとも (三八三・五九) 馬頭か批判也源氏の語にこたふる也此段は惟光か女藤内侍かたくひ也

27 もとはやんことなきすちなれと(三九四・60)末摘の類なるへし兩段は中の品なるへしハ一八オV

28 すりやうといひて(三九七・60)軒はおきの類也

一禅閣勘如此大方カンナノ文ハスミテ可読所々モニコ

リテヨム。ヘキ事ヲモスミテヨムタ、キ、ヨクカト

よくかとくしからざるをも

テ其心ハタカフましき也

29 けしう(三九八・60)下すしき心にもすみてよむきよかるへし云々一注

30 非参儀(三九九・60)参議ニ任せぬ時の二三位人をも又公卿の前官をも共に通していへり肝要は太政官の政務にあつからぬ人のこと也一注

31 ねぐし(三九一〇・60)

32 かはらかなり(三九一一・60)さはやかなる也

33 家のうちにたらぬ事など(三九一一・60)明石の類也もとのねさしいやしからぬなど明石入道にハ一八ウ

Vかなへり

34 宮つかへにいてたちて(三九一三・60)桐更衣の類

35 すへてにきはしきに(三九一四・60)源語也

36 もとのしな時世のおほえうちあひ(四〇一・61)

馬頭か詞也 女三宮の類也

37 うちあひくすくれたらんも(四〇三・61)藤壺の類

38 さて世にありとしられず(四〇六・61)夕かほの上此類也

39 父のとし老(四〇九・61)藤式部かいもうとの類也

40 いてや上の品とおもふにたに(四一四・62)源の心に

葵く上の事を思合せたまふ葵もしわさなど何事すくれたりとみえ給はぬにや

41 しろき御そとも(四一五・62)御そともとは先きぬを

いへり但衣装の惣名にいへる所もあるへし一注ハ一

42 なをしはかりをき給て(四一六・62)夜陰の事なれば知音の中にては指貫を略してなをしはかりひきかくる

事勿論也一注

43 女にてみたてまつらまほし(四一七・62)二の義あり

一は女になして也一は女になりてみはや也なを可然歎

44 大かたの世につけてみるには(四一八・62)馬頭詞

45 おのこの大やけに(四一九・62)此段肝要也

46 とすればかくり(四二〇・62)そへにとてとはさありと思くてとすれば又かくりと也世中のさま也あふさき

るさとはあふさまくるさまの心也たとへは縦横に事の
たかふ心なるへし

47 なのめにさてもありぬへき人の (四一・12・62) 大かた
子細なき人のかたき也なのめは十分ならぬ詞也大かた
などの心歎

48 かならずしもわかおもふにかなはねと (四二・2・63)

此詞はすこしなため用心ハ一九ウV也おもふにかなは
ぬ女をもすてかたくおもふへき男の事をいへり
49 がたちきたなけなく (四二・6・63) 一種也又めのある
様也

50 おほとかに (四二・7・63) 大やうなる也

51 ことえりをし (四二・7・63) 言をえらひつたふ也
くろナシ
ヒ

六条の御息所の類なるへし此段は兩人にたとふへし

52 又さやかにもみてしかなと (四二・8・63) 文かきな

とくほのかなるといふに對して又とはいへりその人を
く(オナシ)
よしもみはやとおもへはずへなくほとをへてまたせな
ヒ(オナシ)
としてやうく云よれば又幽にあへしらひて物を思は
する体也又文のほのかなれば又さやかなるをもみはや
と^{ナシ}思待^也心にや

53 わつかななる声きくはかり (四二・8・63) 是よりは木枯

の女のたくひ也ハ二〇オV

54 ととりなせはあためく (四二・10・63) とりより^セなと
ヒ^{ナシ}
して心みればあたくしくみゆる人あり是第一難也

55 ことか中に (四二・11・63) ことなる中に也^私
に^事准するともなき大かたの事也^(朱)
此詞は誰

56 なのめなるましき人の (四二・11・63) なのめなく^{マゴる}まし

き人とはなをさりならぬ人とく也^{云心ナシ}しかるへき女のこと
をいへり又はなをさりにすましき男のうしろみの事を
いふにや^{ナシ}云々

57 ものゝあはれしりすくし (四二・12・64) うしろみのか

たにはあはれをしり過しをかきかたなくともとおも
へと又あまりにまめくしきはかりなるも口おしきと
也

58 ひさうなき (四二・14・64) 無貧相也又は無美相^共此段

はゆひくひし女のたくひ也但それはこのさまよりはす
こしやさしき方もありきハ二〇ウV

59 こめきはらかならん (四三・7・64) こめきはおほや
うなる也^{ナシ}巨字の心也此体は紫^ノ上の類也乙女の卷^{ナシ}ニ雲
井雁十四才またかたなりニ^私みえ給へといとこめかしう

しめやかにとありおさなき心なるへからす

60 つねはそはくしく(四三・12・65) かたちのまさま也まはたのひらナシ
花ちる里の類也

61 いまはたゝしなにもよらし(四三・14・65) 此詞一部の
肝心也と花にもあり可思にや

62 物まめやかにしつかなる心の(四四・2・65) 葵上の類也

63 あまりのゆへよし心はせ(四四・3・65) 故とは種姓な
とにや由とはよせある事歎也おなし事なからすこしかは
るへき歎心はやはその外なるへし世(朱)ナシ

64 えんにものはちして(四四・6・65) 夕貞の上の類也
和抄えんにはうつくハ二一オVしくやさしき也

65 うらみいふへきことをも(四四・6・65) かゝるたくひ

はよろしからぬ也シテ「怨ヲナシト而友ストルハ」云リ「ともみり古今集(ママ)」

66 うちひそみぬナシ(四五・5・66) 和抄ナシかいつくるくハとて口
のいてたる也又眉をしはむるをハもいふ

67 うらめしきふしあらさんや(四五・9・67) 伊勢物語
の身のはかなくもとよめる段などの心にかよへり

68 又なのめにうつろふかたあらん人を(四五・12・67)

なをさらに思てうつろふ事あらん男などをは女もおも
ひとるへしと也

69 心はうつろふかたありとも(四五・13・67) 男の心うつ

ろふかたありともあひそめしハ二一ウV女の契をい勢を契歎と
おしく思はをゝさてもありぬへしとにや

70 さやうならんたちろきに(四五・14・67) 心かろくは中
もたえぬへきと也

71 すへてよろづの事(四六・1・67) 上品の機なり紫上の
類

72 えんすへき(四六・1・67) 物ねたみの事也

73 さしあたりてをかしとも(四六・6・67) 頭中詞

74 たのもしけなきうたかひ(四六・7・67) 朧月夜の内侍

督の類也云々トナシつなかぬ舟の詞にこたへてみれば男の
心心のもしけなからんことハみえたり如何ハ

75 わか心あやまちなくてみすくさは(四六・7・67) おと

この心にあやまちなくて女のあしきことをみすくさ
はともみゆ所詮此段男女たかひに此理ともみるへきに
や

76 それきしもあらし(四六・8・68) 又それもいかゞと也
ハ二一オV

77 ともかくもたかふへきふしあらんを(四六・8・68)

畢竟の理也ともかくもといへるより惣テの批判とみるへきにや

78 わかいもうとの (四六10・68) 此さためとは畢竟品定の事にや

79 ひゝらきるたり (四六12・68) 鳥の羽をふるひたるやうにほこりたる体也

80 あへしらひる給へり (四六12・68) 以上一日講分
81 系ところに (四七4・68) すみかきニ墨書は下絵の事

也うへのさいすく事は絵の具にてまきはし侍れは中くやすし下絵か大事なるといへり大かた唐絵も墨

に
絵筆勢はこもるものなるへし一注

82 心しらひ (四七12・69) こゝろつかひ也ハ二二ウV

83 てをかきたるにも (四七13・69) いま一たび取ならへて関の岩かと関の岩清水ナシにの哥の差別のことくなるへし

84 法のしの世のことはり (四八6・69) 見花鳥

法花三周説 源氏君は世をまつりこち給ふへきしたかたなれば世上の善悪などをくはしくしらせ奉るへきために種々に申也

85 はやうまた下らうに侍し時 (四八8・70) 馬頭同ナシか過しことをかたる也

86 きこえさせつるやうに (四八8・70) ひさうなき家とうしのなといひしさま此女のたくひなる心みえたり

87 いとかゝらておいらかならましかは (四八11・70) おいらかはおとなしき心也又まことしき心也

88 すゝめるかたとおもひしかと (四九4・70) さし過たる心也一本すゝめるとありハ二三オV

89 とかゝになひきてなよひゆき (四九4・70) 此女の馬頭になひく也花鳥ニハ女になひく世々次ノ詞ニ合ては如何

90 をそましく (四九12・71) をぞモき也云々をそろしき心なるへし

91 いひくめし (五〇3・71) つよくいふ心也

92 あいなたのみ (五〇6・71) かひなきたのみといふ心也あちきなき心也又無愛云々

93 えうらみしなといへは (五〇13・72) いまは女もえうらみしと馬頭かいふ也

94 いみしくみそれふる夜 (五一4・73) そのよのさま余情あるへし

95 人くあかるゝ (五一4・73) わかるゝ也問云別事

96 いゑちとおもはんかたは (五一5・73) さためたる人云々かの字にこりてよむ一勘如此へき歎

なき心也^ハ二三ウ^ウ V

97 ひほの。にかへに―(五一・八・73) 耿々残燈―の心あり

98 こよひはかりやと(五一・10・73) 頭をこよひなとやと侍さまなりとみし也

99 ひたやこもりに(五一・12・73) 直隠無意趣なる心也心えかたきさま也

100 きるへき物(五二・1・37) おとこの衣裳也

101 わかみすて^{ナシ}ん(五二・2・73) 女のみすて^{ナシ}ん後^{ナシ}まで

をおもふ也

102 うるさくなん(五二・21・74) うるはしき也つねにうるさきといふにはかはる也

103 あへまし(五二・13・74) あやかるへしと也

104 はかなき花もみちといへと(五二・14・74) 自然のはなもみちさへときによりて善悪ある事也此女のしわざのよき事をほむるに對していふ詞也此詞ことにおもしろき心也

105 うちよみ(五三・3・75) 哥よむ事也

106 みるめもこともなく(五三・4・75) 無事はほめたる詞也よろつにわたるへし^ハ二四オ^ウ V

107 大納言の家に(五三・10・57) 誰ともみえず頭^ニ縁^有人

なるへし只大納言といへるおほつかなし馬頭父にや

108 こよひ人まつらん(五三・11・75) かの殿上人女に契けるにや

109 水かけ(五三・12・76) おもしろき詞也^{からぬ}

110 律のしらへ(五四・4・76) 秋冬は律也女も律に叶へり

111 いまめきたるもの、声なれは(五四・5・76) 和琴なれはいまめきたると云々管絃も昔よりつたへきたる事はめつらしからすいまやうにめつらしき妙手は出くる事也一注

112 庭のみみちこそ(五四・7・76) 秋はきぬ―の心あり

113 ねたます(五四・7・76) ねたみいふ心也跡もなければといふもねたむ心ありていふ事也哥ニ此心みえたりつれなき人をなよめりねたまぬといふ説あり曲もなかる

へし花鳥にはかくいひて女に^ハ二四ウ^ウねたまする也

114 月もえならぬ(五四・9・76) 異本菊も云々えならぬはた^ナならぬ心にや

115 た^ナとき^ナ打かたらふ(五五・1・77) 前に木の道画工などのたとへにいひしことく大方の物と実^ニ用へきとの差別也何事にもわたるへし

116 おらは落ぬへき萩の露―(五五・7・77) 引哥までもあるへからすえん過あためきたるさまなるへし末詞^ニすきたはめらん女にとあり

117 な^ナとせあまり(五五・9・77) 説くあれともしるて年

数をたゝすにをよはず予章七年而後与衆木異述異記

118 この人こそほと(五六六・78)女の頭中將をたのむけしき也

119 いきやことなる事もなかりき(五六一三・79) 八二五

オV此詞ナシにことに幽玄也云々源の御心をはかりてかた

り給はぬ也

120 あれたる家の露しけきを(五七二・79)此さまあはれ

ふかし

121 むかし物かたりめきて(五七二・79)うつほの物語に

これに似たる事ありさしてはいつれの物語にもかきるへからず

122 さすらふ(五七一〇・80)

123 されはかのさかなものを(五八四・80)馬頭詞也

124 この心もとなきも(五八六・80)夕白のさまをいへり
いづれも難なきにあらずと也

125 くさはわひ(五八九・81)種の心也

126 くすしからん(五八一〇・81)くすみてナシたる也和抄わつ

らはしき也

127 おのこしもなんしさいなき(六〇一・82)大かた男子

はや進退すナシきもの也と云々すくせのひくかた侍めれはと

よみきりて次の詞をみるへし八二五ウV花鳥くおとこの
ためしさいなきと云々

128 ふひやう(六〇八・83)腹痛也 和抄風の病也云々

129 おいらかに鬼とこそ(六一五・84)まことにといふ心
也

130 すへておとこも女も(六一八・85)馬頭詞也此ときの
批判者也

131 三史五きやう(六一九・85)又一段也

132 なとかは女といはんからむに(六一一〇・85)

女とても世にある事なと一向にニ知らても口おしと也む
らさき式部か才のほとみえたり自然にニ知へきといへ

るはく三史五経まではことくしきの心あるにや

133 この人のたをやかならましかは(六一一四・85)此かた
のとある本もあり此かたとは文かきの事をいへりの歎

134 上らふ中にも(六一二二・58)哥よむへき人のをしへな
るへし

135 えならぬねを(六一二六・86)詳花鳥八二六オV

136 九日のえんにまつかたき詩の心を(六一二六・86)

同上次詞にニ菊の露をといへる哥などの事なるへし

137 よろつことになとかは(六一二一〇・86)おもひわかぬ
程の心にてはなさけたむ可矣くらん不ナシ然とにやさてもとお

- ほゆるおりからとはけに後におもへはをかしくもある^可
 へきといひし時節のこと也おもひわかぬはかりの心に^有
 てはといふに両義あり一ニハ分別なき心と云々又すこ^儀
 しは分別ある心をいふ云々はかりといふ詞ニあたれり^に
 又花鳥の儀も可然歎前後の詞ニかなへりとみゆ^私 此段
 能く意得わくへし大かたの人の事を云り先なとかはと
 よみきりて心得へし
 138 すへて心にしれらんことをも (六二二・86)
 此詞殊勝のをしへ也云々
 139 はてくはあやしきことゝもに成て (六三二・86)
 異本あやしきろん共に云々一日講分ハ二六ウV
 140 からうしてけふは (六三二・86) 霖雨の晴かたかりし
 空のはれたる心也御物忌もあきたる心にて日のけしき
 もといへり
 141 御木丁へたてゝ (六三九・87) 源氏の打乱給へるおり
 なれは装束は丁をへたてゝおはする也又源氏のあなか
 まとありしくは大臣との間をへたてゝとみゆ^か
 142 あつきなと (六三三・87) おとゝの心やましくおもひ
 てかくの給ふ也^に
 143 二条院もおなちすちに (六三三・87) 詳花鳥
- 144 けによろしきおまし所にもとて人はしらせける (六四
 9・88) 紀守か人をやりてこしらふる也よろしき所^{かるへき}
 にくとされ事をうけていらへ申也但さふらふ人の詞歎
 145 おもひあかれるけしきに (六五四・89) 空蟬をは父の
 内へまいらせん事とおもひし人也ハ二七オV
 146 さうしのかみより (六五八・90) をのひまよりにや^{紙ナシ}
 147 式部卿宮のひめ君に (六五四・90) 權齋院事也さる事^ヒ
 ありしなるへし
 148 こゑもんのかみの (六六九・91) 空蟬の父は中納言に
 て督を兼したり
 149 さえ (六六〇・91) 才也さもしすみてよむ云々
 一注在
 150 かしつくや (六七三・92) うつせみをかしつくらんと
 也
 151 わたくしのしうとこそ (六七四・92) 源氏君二所を^の
 置て私のしうと申也
 152 おろしたてんやは (六七六・29) 紀守もすきものなれ
 は伊与介も心をはゆるさしと也
 153 いつくにおはしますそ (六七二・93) 空蟬詞也
 154 いもうとゝき給 (六八一・93) 見花鳥
 155 やゝとのたまふに (六九〇・95) 中将を源しの召よす

さま也△二七ウV

156 したひきたれと(六九13・96) したひきたれるにや

157 きはゝきはとこそ(七〇6・96) 身のさたまりたるを
いへり

158 みなをし給のちせもやと(七一7・97) もとの身な

ら源氏にとはれたてまつらは御心さしをるか也ともみ
なをし給ふやともたのむへきにと也

159 うきねのほと(七一8・97) うきたる心也

160 みきとなかけそ(七一9・97) 古今ニハいひそとあり

161 をろかならず契なくさめ給(七一10・98)

此夜実事ありやいなやの事説々あり或説には貞女の
種なれは実なしとみるへし云々但此時はあひたるよし

詞ともにもみえたり一夜はわりなくしたかいてもその

後つれなくてやみぬる事尤貞節ある心にや此義可用也

162 つれなきをうらみもはてぬ(七二5・98) つれなきと

よみ給へるは中将のきく△二八オVをつくみて也

云々又たとへあひたりともつれなかりしさまをうら

みてもいふへきにや恨もはてぬなとある詞にこもるへ

き歎

163 ことゝあかくなれば(七二9・99) あやにくに明行け

しき也

164 こさうしのかみより(七二13・99) 障子のくよりみる

にや云々 一注如何

165 月はありくけにて(七二14・99) あしたの月のさま妙

也たゝみる人からおもしろし作する人なとことに如此
なるへし

166 心えぬすくせ打そへる(七四11・101) 受領の品にさた

まれる事又源氏のかやうにの給事などをおもふ也

167 殿にかへり給ひても(七三4・99) 二条院云々忍婦之

故也此程は大殿にのみおはします如何

168 くひほそしとて(七五8・102) かひなきといふ心也

169 ともかくても(七七1・105) 女のおもひとりたる心
殊勝也云々△二八ウV

170 はゝきゝの心をしらて(七八4・105) 前ニ注ス

171 そのほらやふせくにおふる名のうきに(七八6・106)

ふせやにとはいやしき心也卑下の心はへ也両首よみか

はし給とみゆをのくひとりこちたると云儀あれとお

なしくはゝきゝをよめるは御かへしとみゆ

172 童殿上 問云帚木卷ニ伊与介か子の殿上すへきよしみ

えたりいかやうのしなる人そくうへきにか一答昔は

人の種姓さたまらず或は地下或は殿上時ニ随く也くそ

の子のわらは昇殿したるを童殿上といふ也父は地下に

てもあるへし

173 なにかしはしれものゝ物語を(五五13・78)私万第九水
江浦嶋子長哥世間愚人乃吾妹児余しれ八二九オVもの
師説引之

174 つなかね舟のうきたる(四六5・67)文選第十三賈誼
六臣注

鵬鳥賦澹乎若^ニ深淵之静^一・泛乎若^ニ不繫之舟^一・注云深淵無

波散舟^ノ真人^ノ用心不揺動無趣向亦似之也同注之^{ナシ}鵝冠

子日泛^ミ乎若不繫之舟^之

栄花四^ミハテヌ夢^ノ助信權中納言敦忠一男母參議
父御藏頭助信母和泉守俊連女 源等女

栄花四^ミハテヌ夢^ノ父内藏頭助信母和泉守俊連女助信權

中納言 敦忠一男母參議源等女

あはた殿四月つこもりにほかへわたらせ給ければいつ

もの前司相如^{スアユキ}といひける人のとしころかうのゝしらせ

給関白殿にも参^らてはゝこののをいみしきものにた

のみきこえさせつるものゝ家なり八二九ウV中河^ニ左

大臣殿ちかき所也けりその^{ちよ}くらのかみすけのふの朝臣

といひける人のつくりてすみけるいけやり水山などあ

りていとおかしうつくりたててとのゝ御かたかへ所

といひおもひたりける家也けり
白氏文集 試玉要焼三日満 真玉焼三日 弁材須待七年期 預樟木生七 年而復知

空 蟬

ならひに三の様あり此卷は堅の双也帚木の卷のつゝき
也をよそ並とする事河海花鳥^ニ見たり

1 われはかく人にくまれてもならはぬを(八五1・

109) 八三〇オV源氏の君好色のよしみえたり

2 西の御かた(八六9・111) 彼人の家西のかたにあたり

たるにや

3 にしさまに(八六12・111) たつみのかたく^よりすちかひ

て西の方へみ給也

4 こきあやの(八七1・111) 見花鳥

5 なにゝかあらん^むうへにきて(八七1・111) ひとへかさ

ねのうへにうはきをきるへし^一 講義 又説あり但ほかけに

不分明は何にかといへる也

6 ひきかくしためり(八七4・111) 碁をうつ時はあらは

なるへき手なるをよくかくしたる也

7 ふたあい(八七5・111) 在花鳥^{おかはなとあをはなどにてそむる也} 二藍也ふたえともよ

む也一注同 一答ふたあるともふたへともいふ同事也

8 はうそくなる(八七6・111) 見花鳥

9 そゝろかなる(八七7・111) すこし高きやうにや八三
〇ウV

10 さかりは（八七九・111）さかりたるさま也はの字濁祇
又云籍のふりは同心歎

11 しつかなるけをそへはや（八七11・112）人の性ををし
へたる詞也

12 おくの人は（八七12・112）奥のかたにむかへる人と
云々一講但如何又有了見

13 ちにこそあらめ（八七13・112）地也或持云々

14 いてこのたひは（八七14・112）軒荻の詞也

15 いよのゆ（八八1・112）雑芸のうたひ也

16 たとしへなく口おほひて（八八2・112）うつせみのて
い也

17 めすこしはれたる（八八3・112）腫たるやう也一注ひ
たいたかニはれくとしたるさま也云々尤可然

18 はななども（八八3・112）鼻などもたかゝらぬにや

19 いひたつれば（八八4・112）空蟬はよからぬかたちな
れと進退などのもてなしによくみゆく也是又人のをし
（と朱）

へ也八三一オV

20 このまされる人よりは（八八5・112）見花

21 にははしく（八八6・112）軒荻事也

22 たゝみひろけて（八九12・114）屏風にや次詞ニみゆ

23 やはらかなるしも（九〇3・114）優になまめかしきさ

ま人にかはるへし

24 夜中にはなそ一（九二11・117）さかしかりて小君を

さかしといふ歎

25 いよくおほしこりぬ（九三8・119）心うき事也

帯木の事

拾恋二

かた岸の松のうきねとしのひしはされはよへるにあら
はれてけり八三一ウV

夕かほ

堅のならひ也空蟬巻の同比の事よりあり見花鳥

1 はしとみ（一〇一5・123）見花鳥

2 たけたかきや（一〇一7・123）はしとみのうへよりみ

る女をたけたかきやうにおもひやりたる也一勘云はし
とみの上よりのそく女を床などをふまへすはたけたか
くおもひやる心也

3 かとはしとみのやうなるを（一〇一10・123）

（後筆）
まことにかりなる体也

4 いつくかさしてと 玉のうてなも（一〇一11・123）

源氏の性みえたり殊勝也云々

5 をのれひとりゑみのまゆ（一〇一13・124）夕かほのつ

ほみ蠶のまゆニ似たる故にいへりひとりとは小家のさ

- 6 されたるやりと (一〇二・四・124) 両義ありふりたる心義
 可然歎入三二オV
 7 ありつるあふき御覽す (一〇四・五・126) 先とふらひをし給て今御覽する心殊勝也
 8 心あてに (一〇四・八・127) さし通たるやうなるさまなれ共源氏とおもひやりて折ふしのなさけに出したるあふきなるへし
 9 ひかりそへたるは (一〇四・八・127) 源氏によそへたる也
 10 揚名介 (一〇五・一・127) 三ヶの一也
 11 あらぬさまにかきかへて (一〇五・七・128) 用心源氏也深(朱) 譯
ヒ(朱)
 わかなの巻に此心みゆ
 12 よりてこそ (一〇五・八・128) なたたき心也夕かほを女によそへよめり又女のほのくみつるとよめるに答てなれてこそとよめるにや
 13 ゆきゝに御めとまりけり (一〇六・六・128) 恋路のならひいさゝかなることよりそくはくの思と成也世のうらみなともおなじかるへし
 14 その人とは (一〇六・10・129) 夕貞君事也夕かほの君のめのとほ揚名介の妻入三二ウVのむすめ也
 15 おいらかならましかは (一〇七・11・130) こゝにては大やうなる心也おいらかはうらくとして人になひきやすなる女をいふそれは又たれにもさるへきほとに心くるしきあやまちとはかけり一禪勤
 16 ありし雨夜の (一〇七・13・130) 大人の耳に細事をいるゝ事あしき事也ナレ
 17 物まめやかなるおとなをかくおもふも (一〇八・七・131) 源氏の自身の文かみ又空蟬のためなるへし
 18 むまのかみのいさめ (一〇八・八・131) 女の事ゆへ名をもたつなとかたりしこと也
 19 ぬしつよくなるとも (一〇九・四・131) 人の性のみえた心事心うへし
 20 秋にもなりぬ (一〇九・六・132) いとゝ物おもひそふ時分也
 21 よはひの程 (一〇九・11・132) 源十六才宮す所廿四才也ニ
 神卷ニ御息所卅とあり源廿二才也入三三オV
 22 さふらひわらは (一一〇・10・133) 花鳥ニ童女云々或説不審云々さふらひはさふらふ心也わらはの品定かたし花鳥ニしるせり一禪勤ニ
 23 中屋に (一一一・八・134) 中将の事也和抄問云女の指貫をきる事いかなるときにか一答女は馬ニニ
 のる時指貫をきる也
 24 むかしありけんものゝへんけ (一一四・七・137) 河花ニ

みゆ

25 たいふをうたかひ(一一四・9・137)花ニたいふとありすまニ民部大輔云々朝臣ともいへり但それによるへからざる歌一日ナシ

26 八月十五夜(一一五・14・139)

27 されたるくれ竹(一一七・3・140)前ニいへるニ同之花

28 かへの中のきりくす(一一七・4・140)毛詩花

29 うすいろ(一一七・7・140)紫のうす色也入三三オV

30 みたけさうし(一一八・4・141)みろくニ尊とて河内方本

31 かやうのすちなともさるは心もとなかめり(一一八・12・142)行すゑかねてたのみかたさよの詞をうたかはしくおもひ給也云々一注

又哥のさまざまものはなくなうたかはしき人さま也と云々しかるへき歌

又心もとなく源氏の君の思ひとかめ給へる心歌一勘如

32 いさよふ月にゆくりなく(一一八・13・142)同ゆくりな

くゆくりか同心歌也一勘不意と書也

33 右近(一一九・2・142)とても夕かほのめのめとのむすめなり

34 きりもふかく(一一九・4・142)道すからのさま思ふくへし云々

35 山のはの心もしらて(一一九・9・142)山のはは月をか

くす所なるをしらて行月の心也山のは源ニよそへたり次の夜うせし人なれば何と入三四オVなくあちなき心ありしなるへし36 むつまじき下家司にて殿にも(一二〇・1・143)左大臣故にもつかうまつる也

37 へちなう(一二〇・9・144)別の屋也和抄

38 露の光やいかニ(一二〇・14・144)夕かほおりし時の事などをおもひての給へりと云々39 光ありと(一二一・2・144)扇をいたしたりし時の事今はつかしかるへき特のことなれば返哥大事なるにやそのおりはそらめおほつかなかりきとおほめきたる哥也又今案あり次詞ニけに打とけ給へるさま世になくなとある詞を朱みるに了見あり但如何

40 あいたれたり(一二一・6・145)あまへたるさま也和同

41 六条わたりにも(一二二・4・146)源の思出し給をたよりにて霊も通し也入三四ウV

42 ことなることなき人(一二二・9・146)夕かほは三位の

女也

43 うへわらは(一二三・9・147)殿上童河問云一殿上した

る童をいふ歎^也云 上童^{ナシ}童事歎一勸

44 さふらひつれと仰事もなし(一二三・12・148)あつかり

の子の申詞也

45 滝口也^成ければ(一二三・14・148)同あつかりの子歎

蔵人方被官也いまの世ニ貫首^ニなどの拜賀とは是を召員

^{ヒ(朱)ヒ(朱)ナシ}

する也院にては武者所といふ也一勸

46 けしきあるとりの(一二六・4・151)山にすむふくろ

ふく^とはこれにやと河内本ニあり面白と云々

47 うはむしろに(一二八・14・154)問云いかやうの筵そや

一答なき人をむしろにてつゝみてほかへうつつすをいふ

也

48 さゝやか(一二八・14・154)問云さの字清濁如何^{一勸}

49 心のむくひ(一二七・1・151)藤壺^御の事也入三五オV

50 しのふとすれと世にある事(一二七・2・151)源のかへ

りみ也天地人しる理也可在^思之

51 蔵人の弁を(一三一・2・156)頭には大方をかたりて弁

してくはしく奉給也頭^中ノ弟云々

52 日^{一日講ナシ}くれてこれみつまいれり(一三一・4・157)

53 谷におちいりぬへく(一三一・11・157)うきたひことに

の心にてかけり此所靈山辺にや

54 なにかことくしく(一三二・8・159)惟光か答たるす

こし心えかたし源氏のことなくと仰あるは無事^ニある

へきやうにとの心なればさやうにことくしくはいか

ゝと申にや末詞にもことそかすとみゆ又打むきても心

えられ侍る答也

55 清水のかたそ(一三三・9・160)十七夜参詣のさまなと

にや入三五ウV

56 わか紅の御その(一三四・14・162)源のをきせ給し也さ

まくおほし出る也

57 ふくいとくろうして(一三六・6・163)服衣色ふかき也

58 内の御とのる所(一三七・3・164)きりつほ也

59 あまのこなりとも(一三七・10・164)彼院にて^{夕かほの}みいし

事を思ての給へり

60 こその秋のころ(一三九・1・166)嵐吹そふとよみしと

きの事也頭中夕白との契三年斗と云々二年めに玉かつ

らをうめり四年めに源し^氏ニあひ給五年めに玉かつら西

国^へにくたり給

61 いゑはと(一四〇・6・168) 鶴^抄和名見河

62 ありし院^ニこの鳥のなきしを(一四〇・6・168)はとの

声をきゝて梟のなきし事をいへる心えかたし然ていま
ふつゝかに「はとのなくをきゝてかの院にて梟の声を
女のおそろしと思^ルくしとさまをおりふし思^出いたまふな
る入三六オVへし」又此鳥のなきしとよみて梟の事を
いふ也云々わつらはしきにや彼院にてもこの鳥のなき
しなるへし

63 なく成にける御めのとの(一四〇10・168) 右近か母も

ゆふかほの上のめのとなりし事也^{ナシ}

64 けふりを雲と(一四一6・169) 空のうちくもりたるけ
しきよりよめるにや

65 かのうつせみのーおいらかならましかは(一〇七10
・130) おいらかはこゝにては大やうなる様なる心な
るへしうつせみの大かたの人のやうにて源氏になひ
きなどし侍りなは源氏も中くやみ給事もあるへき
の心也

66 しをん色のおりにあひたるうすもの裳(一一〇3
・132) 世のつねにはしをん色の裳と心えたる歎僻事
也しをん色のきぬにうすもの裳也紫苑色とはおも
てはすはうら萌黄也河海入三六ウV

(神宮文庫本 77の後にある)

九月廿日あまり空のけしきなど思へし

67 さしいらへもきこえず(一四一7・169)

右近^{はかり(巻ナシ)}いたりはちたる心也返しせざる事感あり云々
ヒ(巻ヒ)ヒ(巻ヒ)

68 とをくくたりなん(一四一11・169) 伊与へ也

69 とはぬをも(一四一14・170) 源氏のなやみ給しをもう

つせみははかりて問奉らぬを源氏も又なとかはと^{ナシ}
ぬともをとつれ給はてほとをふる事を空蟬のとかく思
わつらふよし也

70 少将の心の中もいとをしく(一四二8・170)

藏人少将しせん知たらんをかなしかるへしと也

71 ほのかにも軒はの(一四二11・171) かことこゝにては
かこつ義也

72 ほのめかす風につけても(一四三2・171) なかはと
あるを源氏と少将との事を思^{ナシ}ひむすはるゝ心也云々
如何霜にはとはむすほ^ウるゝ縁也入三七オV又了見あ
り哀もふかゝるへき^也

73 なくくもけふはわかゆふ(一四四2・172) 施し給ふ
袴に手をふれ給さま也

74 此家あるしそ(一四四11・173) 揚名妻は嫡女歎又一人
はつくしにすみつきたり一人はのほりき

75 ぬさなと(一四五6・174) はらへ也和一

76 行かたしらぬ秋のくれ哉(一四六1・174) 立冬なれとも秋暮とよめり大やうなるこゝろにやかゝり火にも此類あり

77 なとか御門の御子ならんからに(一四六3・174)
此段不違注也ハ三七ウV

若 紫

源氏君十七歳

1 北山(一五一2・177) くらまとみゆ

2 こそこの夏も(一五一3・177) つねに世にあるさま也

3 山のさくららは(一五一8・178) 本哥を引にをよはず面白時節也

4 さるへき物つくりて(一五二1・178) 封となるへし

河内方本ニはふんとあり

5 おなしこ柴なれと(一五二4・178) よろつの事しさまによりてやさしくみゆる也

6 きよけなるわらは(一五二8・179) 僧都の童なるへしと云々又尼公のかたの女わらはにちもや

7 いかに御ゑいみしう(一五三3・180) すまにて絵をかき給しことのおこり也

8 富士の山なにかしのたけ(一五三3・180) 花鳥義可然
歎

9 ゆほひか(一五三七・180) ひろき心也 ひの字一禅は

濁てあそはしき或云ゆほハ三八オVいかとよむと云々
10 家いたしかし(一五三八・181) かたはらいたき心也和
—事すきたるなといふ心なるへし

11 京にてこそ所えぬやうなりけれ(一五四2・181) 心えぬと両義也

12 さはいへと国のつかさにて(一五四3・181) 人にもあなつられてなといひしかとさすかに余慶ありしと也

13 海にいりねと(一五四9・181) 夢のつけありし故也

14 いつきむすめ(一五四11・182) 一禅いつきとあそはし
たり^る

15 母こそゆへあるへけれ^{有けれ}(一五五1・182) 系図ニハ誰と

もなし松風^の卷ニ大井の古郷兼明親王のとみゆしかれ
は彼御女ニ准して心うへきにや

16 なさけなき人になりゆかは(一五五3・182) 人なりゆかはと両義也

17 そのみるめも(一五五5・183) 本哥難用歎ハ三八ウV

18 かすみたるにまきれて(一五五12・184) かゝる所にて
も忍給^{ナシ}ふ源の心つかひ也

19 ふせこ(一五六10・185) 鳥いるゝ籠をもちへるにや

20 まゆのあたり打けふり(一五七4・185)

21 かんさしいみしう(一五七五・185) 花義如何末の巻にもみゆ

22 おひたゝんありかも(一五八一・186) 此哥ことに哀れと云々

23 おとな(一五八二・186) 少納言也

24 すゝしき水の流も(一五九二・188) 春秋にかきらす涼しく清くみゆる心也

25 よのつねなき御ものかたり(一六〇五・188) 此時僧都の詞殊勝也

26 物思にやまひつくものと(一六一七・190) 法師の詞とみえたり

27 山風ひやくかに(一六二一〇・191) 暮春山中のさま也

28 ねふたけなる読経(一六二二一・191) 引声のあみた経なるへし△三九オV

29 すゝのけうそくに(一六二二四・192) やさしきさま也

30 ろさりいつる人(一六三三・192) 少納言也

31 すこしそきて(一六三三・192) 此詞つかひおもしろし用心也

32 くらきに入ても(一六三五・192)

33 しろしめしたるけなるを(一六二二一・193) 僧都の大方物語申たりし心也

34 枕ゆふこよひはかりの(一六四二・193) 若草^葉の御披を

すき心にはとりなさぬかへし也み山の苔とは袖をよめる也

35 うちつけにあきはかなりと(一六四八・164) 一禪源詞云々さもやとみゆ問答詞こゝをうけてみるへし

36 さしくみに(一六五三・126) 花^{ナシ}に是も源氏く哥にやと云々如何一本僧都とあり可然歎

37 ひしりうこきもえせねと(一六六三・196) 僧都の坊へ参たるとみゆ△三九ウV

38 宮人にゆきてかたらん(一六六二一・197) ことに幽玄のすかたと云々

39 ときありて一たひひらくなる(一六六二四・197) 前の僧

都の哥は輪王^{マデ}前世の心をもて源に比して申しを源は卑下の心にて仏前世^ニなして答給へりと云々一禪御説は此義なし前の哥の心をうけて答給云々

40 おく山の松のとほそを(一六七二・197) さしあたりたる心殊勝云々

41 独跼たてまつるみ給て僧都(一六七三・197) 聖の何心もなくとこそ奉たるをみて便ありて僧都も色く奉給也機嫌時宜を思へし

42 御薬とも(一六七六・197) 御なやみによせあり

43 まことにや花のあたりは(一六八一・198) 源の御けし

- きをみると也大かたの花のうへにのみよめるくと也又下の心もあるへき歌^{△四〇オV}
- 44 とよらの寺の(一六八九・199) 山寺にたよりあり
- 45 日本のすゑの世に(一六九五・200)
- 46 とはぬはつらき(一七〇14・202) 君をいかけておもはん人にわすらせてとはぬはつらき物としらせん此哥可然む歌
- 47 またくはあさましの(一七一2・202) たまくの給いつる詞のかやうなるとうらみ給也
- 48 とはぬなといふきは一禪(一七一2・202) 夫婦の中にいふへきさまにもあらずと也
- 49 いのちたにとて(一七一5・202) 本哥見河一又命たに心にかなふ物ならは何かは人を忘れしもせん此哥可叶ナ歌
- 50 兵部卿^の宮はいとあてに(一七一10・203) にほひやかにるとあてなるとはかはるとみえたり兵部卿は匂やかなるかたなしと也
- 51 さたすき(一七二5・203) 齡のなかは過たる也和^一
^{△四〇ウV}
- 52 嵐吹尾上のさくら(一七二9・204) 此哥も花のうへのみによめり
- 源氏の君の哥は紫の姫君を桜にたとへてよめりあま君の返哥は一向に花のうへにていへる也一勅
- 53 いとうしろめたうとあり(一七二9・204) 前の文の詞をうけてかけり
- 54 まほならさりし(一七二13・204) 一禪一まを
- 55 あさか山(一七三5・205) なにはつをたにといひし詞に便ありてよみたまへり
- 56 くみそめて(一七三6・205) 本哥のことくくやくやくの心ありあさきながらや影を卑下しはちたる心也影をみすへきはみえかたしと也或は云みるへきは源をたつ待ねみるへき也
- 57 京のとの(一七三七・205) 按察大納言家也
- 58 藤つほの 宮まかて給へり(一七三八・205) 三条宮へ也
- 59 いみしき御けしき(一七四1・205) 深くおもひたる心に歌いみしきは善悪ニ^{△四一オV}つけてちとすくれたる事をいふ
- 60 くらふの山に(一七四4・206) くらき心にて夜をしたふ也花一ニ哥あり
- 61 みても又あふ夜まれなる(一七四6・206) あひみても実なきかこくとく夢の中のやうなれば此夢のうちにさえもうせまほしきとにや

- 62 夢をみ給て (一七五12・207) 此事末卷ニみえたり
- 63 そのなかにたかひめありて (一七五13・207) 花―
- 64 紫のねにかよひける (一八〇1・212) これより紫の上といふ名あり
- 65 南のひさしひきつくるひく入たてまつるゆくりなう物ふかきおまし所になんときこゆけにかゝる所はれいにたかひておほさる (一七七11・210) うちつけに心もをきたてまつらぬやうなると也源もならひたまはぬさまなりとおほす也八四一ウV
- 66 神無月に朱雀院の行幸 (一八〇1・213) 紅葉賀卷の行幸事也末摘卷は横堅の双也紅葉賀は此卷の中末摘の中とにあたる也
- 67 たちぬる月の (一八〇6・213) 九月事也
- 68 御息所に (一八〇8・213) みやす所と号する事更衣をも女御をもしへり又明石の中宮をも申キ懐胎キタイあるより御子を生し給へるを御息所と号する歎とみえたり如何一禪はそれによるへからすと云々
- 69 あしわかのうらに (一八一11・214) 芦のわかきによせたる也
- 70 なそこえさなん (一八一14・215) 花―本哥をすこしいひかへ給へりと云々與入にはニハ末勘云々
- 71 此四十九日すくして (一八四6・219) 十一月上旬彼行幸以後なるへし八四二オV
- 72 立とまりきりのまかきの (一八五2・223) 此事物語のかさり也是又大切事也誰ともなし
- 73 あつまをすかゝきて (一八八7・223) 一禪講尺の時も未分明云々可尋
- 74 車のさうそくさなから (一八八12・225) とりつくるふへき事と惟光おもふへければたゝ常のまゝと仰也
- 75 かゝるあさきをしらては (一八九14・225) いまたよふかき空をいへる面白と云々
- 76 大夫少納言 (一九〇5・227) たいふ女房歎云々大輔歎不分明一禪マゴたいと云々
- 77 御帳御屏風なとあたりくしたてさせ給 (一九一7・227) あるへき所にあたりて也云々花―義如何又し文字未審
- 78 よからねと無下にかゝぬこそ (一九三10・230) 此詞人の性ををしへたる心也肝要也と云々
姑蘇城外寒山寺八四二ウV

末摘花

横堅の並也源氏十七歳の二月の事より次年の春までの事あり若紫の巻の前よりの事也

- 1 おもへとも (二〇一・1・235) 此詞心ふかしさまくおもふ心を含めり
- 2 夕かほの露にをくれし (二〇一・1・235) すゑつむの事
 なとニみゝとゝめ給ふも夕かほにわかれてさやうなる
や(朱)ナシ
 人をみよるとの心也
- 3 こゝもかしこも打とけぬ (二〇一・2・235) 葵上六息所
 などのてい也
- 4 いとらうたけならん人の (二〇一・4・235) 是も帚木の
 物語よりおほしめず也
- 5 こひたちのみこの (二〇二・4・236) 兵部大輔かかの宮
 へまいる便にて侍るなり
- 6 ふかきかたは知侍らす (二〇二・6・236) みる人をくれ
 たるかたをはいひかくしといひしことくのさま也
- 7 いま一くさや (二〇二・9・236) 酒の事也花同ハ四三オ
 V 河海にみえたり但詩はからの哥なれば女もつくらん
 事なかるへきにあらすうたであらんの一くさは酒をい
 ふと愚意には存しより侍り
- 8 きゝ知人こそ (二〇三・9・238) 命婦をさしてしる人と
 云りことの音を聞しる人の此哥の心も叶へり
- 9 むかし物語にも (二〇四・1・238) 花にありうつほのと
 しかけか女の事也又大かたのことをもいふへし
- 10 さすかにかうことかたに入給ぬれば (二〇五・10・240)
(後筆)
ゆくゑなく思ふしに夢にとナシ
 まり給へはさすかにと云也
- 11 御なをしともめして (二〇六・12・242) 内より出給しか
つ(朱)
 ともいづくにても狩衣になり給しにや花一勤一狩衣あ
ヒ(朱)
 りしを直衣ニきかへたる歌
- 12 人わきしけるとねたく (二〇八・4・243) 源のあへしら
 ひのやうかの返事をみ給しやうなれば也ハ四三ウV
- 13 わらはやみに (二〇九・3・244) 若紫同時也
- 14 てをえさし出ぬ (二〇九・10・245) 返事なき事也
- 15 ふたま (二一一・6・248) 本尊など安置する所歎一注
- 16 ほとよりはあまへて (二一一・14・249) 宮の程よりはと
 源の思給也
- 17 朱雀院行幸 (二一一・5・251) 若紫卷ニ沙汰(朱)ナシも源のありし同
ヒ(朱)ヒ(朱)
 時也
- 18 なをいとねふたけなりと (二一五・8・251) 葵巻にも頭
 中の物語ニ秋の事といへる此時の事也
- 19 やかてかへりまいりぬへく (二一五・6・251) しかまか
 て侍まゝ也とみゆ又源と同車して参内し給へりはや大
 殿へも出給しかへさにや

- 20 かさやとりせんと(二一五・11・251)雨によりて書り前に命婦のかさやとりといひしにたよりあり(朱)ナシ
- 21 中さたのすちにて(二一六・8・252)中古のやうにてよろしからぬ也八四四オV末巻ニ筆跡の事をいへるニ近(朱)ナシ
- 代よくなりたるやうニみゆ
- 22 まかて給くにひかれ給て(二一六・12・252)末つむのかたへの御心もありしをひかれて出給なるへし
- 23 大ひちりき(二一七・1・253)今の世のよりも大なる(朱)ナシ
- カ昔はひちりきかむかしはありし也尺八(朱)ナシも笛も一尺八寸にニて楽器ニ用と云々一注口竹をきりたる物むかしありて楽器ニ用候也一勘如此
- 24 くさはひもなく(二一八・9・254)をろそかなるさま也(朱)ヒン
- 25 とひたちぬへく(二一九・2・255)貧窮問答の哥たよりあり
- 26 齋院にまいりかよふ(二一九・5・255)齋院誰ともなし
- 27 ゆるし色(二二一・5・257)紅のうすき色也
- 28 くるきうちき(二二一・6・257)紫の色のくるみたる也
- 29 ふるきの裘(二二二・6・257)むかしも着する事は邂逅(朱)ナシの事也(朱)ナシ八四四ウV裘の事といへりうはきとはきぬよりうへの事云々同
- 30 いともてはやされたり(二二二・8・258)されいへる心也
- 31 あさ日さす軒のたるひは(二二二・3・258)とけなからなをむすはるゝとよめる也又つらく(朱)ナシのさまもさるやうあるへし
- 32 なにたつすゑの(二二二・14・259)花ニハ浦ちかくふりくるの哥あり此時のさまみるやうにかけりわか袖はの哥の詞とみゆたゝ松山の波をおもふなるへし
- 33 袖くゝみにもたり(二二三・5・259)花説如何
- 34 わかきものは(二二三・8・259)おりふし雪の詩を吟し給ふ也一注文集に雪の事をつくれる句也
- 35 世のつねなる程の(二二三・12・260)源姓殊勝也
- 36 つゝみに衣はこの一(二二五・4・262)きぬをいるゝは(朱)ナシこの詩絵にしたる物也一勘八四五オV
- 37 なをしのうらうへひとしく(二二五・14・262)花ニ(朱)ナシ
- まやう色の(朱)ウラおもて同色にやと云々
- 38 みかさくやまのおとめをはすてゝ(二二六・14・264)源の心に常陸宮の乙女といひたきをは(朱)ナシかりてかくの給也たゝ梅花の色のこと風俗哥と花ニアリ奥入ニハ(朱)ナシ
- 求子の哥とみゆ如何
求子駿河舞とて東遊に有風俗は別の事也云々一注
尋へし又口更あり
(神宮文庫本)

- 39 あらすやさむき―(二二七1・264) しらすなとおほめく詞也
- 40 かいねりこのめる(二二七1・264) あかきにすきたるはなや有つらんなとされ事也
- 41 あなかちなる御ことかな(二二七2・264) しるてかくの給を云り
- 42 ついたちころすきて(二二七14・265) 源氏十八才八四五ウV
- 43 節会はてゝ夜に入て(二二八2・265) 白馬ひるおこなはれたるなるへし
- 44 けうそくををしよせくて(二二八11・266) 長きみかうしを引かけ給なるへし上下つゝきたる格子脇息によせかけん事たよりあるへき歎分明ならず但不分明一禪勸
- 45 夢かとおおもふ(二二九5・266) 業平の小野にて忘てはの哥もこの時のさまにあたるへきにと云々
- 46 紅はかうなつかしきも(二二九8・267) 紫の上のきぬの事也
- 47 よりてのこひ給(二三〇7・268) 河内本にはニハ硯水に紙をひたしてとあり云々平仲かやうにとあるにてきこえたるよろしかるへし
- 48 平仲(二三〇8・268) 問仲の字にこりてよむ歎也一答勸
- 49 たゝ梅のはなの色のこと(二二六13・264) 問云風俗にハたゝらめとあり云々たゝらめの花如何 一勸云たゝむめの花といふへきをたゝらめとあハ四六オVやまりてよめる也ら文字むもしに似たるゆへにあやまれる也
- 50 みかさの山のをとめをはすてゝ(二二六14・264) 問云求子の哥の詞をひきて書り云々風俗と求子とは別なるうたひ歎―求子は東遊ナシニありとみゆ如何一勸合点一勸云あつま遊にニ求子駿河舞とてあり風俗は別の事也
- 51 むもんのさくらのほそなか(二二九8・267) 桜色は面はしろく裏はこき蘇黄芳也細長は幼少の貴女の着するもの也河
- 52 すいしんからこそはかくしきこともあるへけれ(二〇六5・241) 永正七八 私 大和物語
○六5・241) 月日私注之
- 定國 泉の大将故左のおほいとのにまうて給へりけりハ四六ウVほかにてさけなとまゐりゑいて夜いたく更てゆくりもなくものし給へりおとゝおとろき給ていつくに物し給へるたよりにかあらんむなときこえ給てみかうしあけさはくにみふのたゝみね御ともにありみはしものもとに松ともしなからひさまつきて御せうナシそこ申す
- かさゝきのわたせる橋の霜のうへを夜はにふみ分こと

さらにこそ

となんのためふと申すあるしのおとゝいとあはれにを
 かしとおほしてそのよ夜一夜おほみきまいりあそひ給
 て大将も物かつきたゝみねもろく給はりなとしけり
 53 王家無等倫（二〇二一・236）わかんとをりとヨムよむ 積尊
 之事世雄無等倫是ヨリ云々四七オV

紅葉賀

源氏十七才十月より十八才七月までの事あり。如何花鳥に十月までとあり

1 朱雀院の行幸は（二三七一・271）宇多御門の御賀に比
 する事花鳥ニくはし但必五十賀とは心うへからさる也
 又垣代四十人の数も説々不同也たゝ院の御賀と心うへ
 し 朱雀院は三条朱雀ニありと云々朱雀冷泉いつれも
 おりるのみかとのおはします院也

2 青海波（二三七三・271）輪台リントイ名也は青海波の序也ナシいつれ
 も舞アリあり

3 花のかたはらの（二三七五・271）深山木のおもしろき
 心ありもナシ

4 神などのそらに（二三七11・272）見河

(三四)

5 多いなとはてゝまちとりたる楽の（二三七9・271）
 楽のをはりに吹たつる事云々ナシ

6 から人の袖ふることは（二三八10・273）四七ウV
 唐楽なるよし花鳥にもありもろこしの事ははるかなれ
 ともいま源氏の舞給さまをあはれとみ給へる心也

7 御きさきこと葉（二三八12・273）后かねなればかく申
 給也一勘藤壺女御つるには女院ニならせ給へる故に
 后にかねといへる也ナシ
ト(先)

8 かいし（二三九4・273）地下堂上相交云々四十人と
 ある事

9 いひしらす吹たてたる（二三九7・274）青海波の時ナシ
 のさま也

10 いたりあや（二三九13・274）河一花ニみゆ 俊頼哥

11 承香殿の御はらの（二四〇2・274）女御たれともなし

12 頭中将正下のかゝい（二四〇4・274）正四位下也一注
 八四オV

13 うらみく給はゝ（二四〇11・275）匿怨友其人一よろし
 からすと也ミツキナシ

14 母かたは三月こそはとて（二四三8・278）紫上祖母逝
 去は九月廿日比とありき九十日は十二月廿日ころなる

へし晦日ニ除服とあるは、日をえらひ給ふにや

15 てうはい(二四三・278) 正月一日の小朝拜清涼殿の前庭ニ諸臣拜云々花鳥ニみゆ

16 内宴など(二四六・3・280) 正二月中ニ清涼殿の前ナシにて文人をめして詩を作講せらるゝ事あり主上並執柄赤色袍を着す保元ニ信西申行て後は絶たる事也一注

17 一院(二四六・7・281) 花鳥ニみゆ先帝と申はましまさぬとみえたり如何

18 しはすもすきにしかは(二四六・11・281) 源氏密通は卯月也みかとの御子なれば三月よりなるへき心にていへり八四八ウV

19 世中の定なきにつけても(二四七・1・281) 藤壺の御心なるへし

20 二月十日あまり(二四七・2・281) ひと月こえたる也キツラキトヲカナシ

21 みてもおもふみぬはたいかに(二四八・9・283) 若宮の御事をよめり

22 いとわひしくおもひのほかなる心ちすへし(二四八・14・284) 命婦かくるしくおもふ也

23 あされたるうナシはきすかた(二五一・2・286) 大樹は一目ナミクヲチヌマデはち(朱)きすかたナシ

かりをきて直衣をき給はぬ也ち(朱)うナシはきはなをしの下にヒ

きるもの也一注

24 さそのことは中のほそをの(二五一・8・286) 中の絃なるへし細絃よりもなをほそき心也中のかみといへる類ナシにや花一義不審

25 平調マツにをしくたして(二五一・9・287) 八四九オV

今案之平調マツニをしくたしてとかけるとのしらへもし壹越性調にてありける歎箏ニハ壹越調をしらふるにかり壹越調さかり壹越調とてふたやうにありかり壹越調とはことちを手もとのかたへよせてたつる也それを一越性調といふ又保曾呂俱世利は拍一越調の樂也平調の曲ニハあらす先まつ平調ニしらへてその調子ともををしへ給て後呂の声になをしてほそろくせりをひかれける歎こま一越調といふはその声平調にて呂なり以上洞院大將入道公數 尺也以件自筆写也

平調律(朱)ナシヨリ絃ノセマリタルハ一越性調律(朱)ナシカリ一コツ又コマテウ也歎

平調歎ニテアリケルヲ平調ニヲシクタルナルヘシ
ホソクセリハコマ一越テウノ樂也平調ノ位ニテ呂ノ
シラヘニカハリタル物也サレハ通メ平調ニハ四九ウV
トイヘルニヤ又平調律ヨリカリタルシラヘニテアシラヘにて有りけるをケル
ヲ平調律ニクタクシテ其外ノ調子ナトヲモヒカセ給テノ

チニコマーコツテウニナシテホソロクセリヲヒキ給ケルニヤイツレニテモ其理アルヘシカタキテウシトモヲトアレハアマタノシラヘノテウシトモヲトイヘルニヤあまたのしらへのノ物ニモテウシヲ引タルヲ今ノ世ニハ管ハカリニ吹事にナリ侍也

長享二十七記之同人部歎

又平調声なれはいへるにや

26 うねめ女蔵人など(二五三・289) いまも蔵人として内

裏伺抵候公す賀茂人などの女也一注

27 御けつりくし(二五四・290) 〆五〇オV

28 みうちきの人(二五四・290) 見花 みうちきとは

きぬのなをしをいふ一注花鳥義猶未審云々

29 かはほり(二五四・290) につかはしからぬとは扇の

さまその人ニ似あはぬ心也

問云かはほり扇 女の用ル事いかやうなる時ニ歎紅葉

賀巻ニ源内侍のもちたるをにつかはしからぬといへり

如何

一答女扇扇はいつもあふきをもつ事は顔をかくす故也但

夏はかはほりの扇也又ときに随テゑかきたる杉目のあ

ふきわか／＼しきをにつかはしからぬといふ也
30 もりの下草など(二五五・291) 老ぬれはとも本ニありなくともその心みえたるにや

31 もりこそ夏の(二五五・291) 花一の哥の心はかなふやうなれとも本ニその詞なし如何〆五〇ウV

52 橋柱と(二五五・292) 世中ニふりぬるものは

33 うへはみ(米)うちきは(朱)いてナシ(二五五・292) 花鳥ニあり

34 頭中将きつけて一(二五六・292) かたらひつきにけり頭中將の好色の心にてゆかしく思てかたらひつきたる也

35 かくしうにありけん(二五六・293) 河内本ニは文君とあり花ニニくはし

36 うたてもかゝる(二五七・293) うたナシ也転也花一

37 人つまは(二五七・293) われや人つまといふ詞ニたよりあり

38 ふるふくつとひかへたり(二五八・294) 頭中将ナシをひかへたる歎

39 かくれなきものとしるく(二五九・296) 誰としられしとかまへたるをうすき心也とよみ給へり

40 うらやみなき 　しとけなきすかたニひきなされて

(二五九12・296) 兩人なからうらハ五一オVやむへき
こともなき体の契なることなれはいふにや

41 うしや世中と (二六一3・297) 本哥ナシ芥未見哥詞ならて

も世間を觀したるにても可然云々

42 延木立后 皇太后藤温子昭宣公女 寛平九七廿六中宮昌

泰二七廿二皇太后皇太后班子女王光孝后宇多母寛平九
七廿六皇太后

花 宴

卷名 南殿桜宴事也

此卷は紅葉賀卷の次年の春也源氏君十九才也花鳥ニクハ

シ花宴例 嵯峨弘仁三於神泉苑有花宴事是初也

ハ五一ウV南殿花宴例 村上康保二三於南殿有花宴花

宴之時探韻例延喜十七年一延長四年二月等例也彼是度

くの例を兼用て此卷ニかける也

花宴在舞樂之例天曆三三十二在之地下舞人はかりにて

堂上の舞はなかりき云々

1 后春宮の御つほね左右にして (二六九1・303) 南殿の

東面ニ春宮のは東面のはナシ右のなるへし

2 日いとよく晴て (二六九3・303) 時節の景宮中のさま
をおもひやりてみるへし

3 その道のは (二六九4・303) 詩をつくるへき人々の
事也

4 たんゐん (二六九4・303) 韻字を一字つゝさくり得て

作也其作法は先題を儒者の定めて後に古詩を一字つゝ
にしてさくるハ五二オV也詩の名句或はときにあひた
る句を用也庭上にして儒者の文台のうへにふせ置を中
少将などおりて主上の御ために韻字をふたつとりて奉

る一勘問之叡慮ニかなはんを一字御用あるへきの故実也
からとゝめおはしまして詩を案し給ふ也諸臣は各一字
を採用也作者十人あれば五言詩二句を一字つゝ韻ニ分

つ也十四人の時は七言の二句を用也 花鳥ニ委

5 宰相中将春といふもし (二六九5・303) 韻字を採得て

は各そのよしみを申す官姓名何の字を給はるとなるの
云々おりふし花宴ニ源氏君の春字を探あたり給事自然

の幸なる事也ことあひたる事なるへしこはつかひ進退

等よろつ事に心つかひすへき事とみえたりハ五二
ウV

6 年老たるはかせともの (二六九11・303) 功者のなれて

おくせぬよしみゆなにも稽古をつむへき事のをしへ也

7 春のうくひすさへつるといふ舞 (二六九 13・304)

春鶯嘯也花宴ニたよりある楽也一名は天長宝寿楽といふかたナシの可然ナシよて此舞ある也

8 けしきはかりまひ給 (二七〇 2・304) 源氏ノ君はいつ

れの舞ともみえず

9 左のおと々うらめしきも忘れて (二七〇 3・304) 源氏葵

上との中のおもふやうならぬ事也

10 柳花苑 (二七〇 4・304) 上古は舞ありき今はたえたり

云々ナシ

11 めつらしき事に人おもへり (二七〇 5・304) 花宴ニ舞

楽のありし例はあれ共堂上舞人のれいはなき故ニめつらしといへり

12 大かたに花のすかたを (二七〇 12・304) 源氏ノ姿のす

くれたるによりてハ五三オナシ 藤ノ心にかクりてさま

く々の事をク思給也大かたならましかは源のうへをさま々思事もあるまじと也露ならぬ心を花にをきそめての心のことし

13 御心のうち也けんむこといかてか (二七〇 12・305) 此哥

藤壺の人にかたり給ふべき事ならねは也

14 さんのくち (二七一 4・305) 弘徽殿ニ南北ニとをりたる廊あり云奥の第三の戸の事也注ホソ殿へ出ル所

二戸三アリ南第三ニアタルクル、ヲサシタル戸也

15 かやうにて世中ノのあやまちは (二七一 6・305) 世にあ

やまちする事などをおもひ給也されとも源氏の今夜のあやまちはおもひつ々もありしなるへし

16 こなたさまにはくるものか (二七一 9・305)

異本ニハの文字なしやすらかなる歌ハ五三ウウ

かはうたかひたる詞にはあらず一注

17 戸はをしたてつ (二七一 13・306)

18 まろはみな人にゆるされたれは (二七一 14・306)

源の自嘆の詞にはあらずをそれぬよしを女にいはんためナシそ了見の詞也

19 うき身世に (二七二 8・307) きえなは草の原までも

尋ネくへきことなるにのりし給へとあるは名のらすは

たつね給ましきにやとかこクちたる哥也

20 ことほりやきこえたかへたるも (二七二 9・307)

なのりし給へといひたることはりをきクたかへ給クたる歌と也

- 21 しかなとて (二七二・九・307) 源の心はしかなりといひ
きかせ給也その心を哥によめり
- 22 いつれそと (二七二・10・307) 此人は弘徽殿かたの人と
みえたれば右大臣と源とは八五四才Vよからぬ中なれ
はたつねんにつけてさはかしき事もあるへき故にこそ
名乗給へといひけれ心さしのおさきにはあらずと陳
したる心也篠ニハ風もことにさはかしく露もとまらぬ
物なればよそへてよめりこさゝ小篠也
- 23 わすらはしくおほす事なくは (二七二・10・307) 前の心
也
- 24 あふきはかりを (二七二・13・307) 唐にも夫婦の契ニ扇
をとる事あり云々合歡扇カウクハンなどといふ事あり一兩方とり
かへたリナレくる一注
- 25 帥ノ宮の北方 (二七三・3・307) 螢兵部卿の事なるへし
中々それならましかは (二七三・4・307) 今夜の女も
源の心にあひたれとも中々とは世なれぬよりの心歎
27 まつかのわたりのありさまの (二七三・8・308) 左大臣
のあたり葵の上カのありさまのおくふかき事也源の心に
善悪をはよく分別し給ふにト八五四ウVみえたりト
- 28 後宴の事 (二七三・9・308) 花宴の後宴ととりなし給也
給しからは葵辺可然歎
- 29 かのありあけてやしぬらんと (二七三・11・308) 花宴
の物見に右大臣の女たちのまいる給しか帰給へしと思
て誰くなるらんムなとうかゝはせ給ふ也ナレ
- 30 御まへよりまかて給ける程に (二七三・13・308) 源の御
前よりまかり出給ふ時分惟光等帰きてかたる也ナレ
- 31 四位少将左中弁私右なるへしなど (二七三・14・308) 右大臣の息也
- 32 ひめきみいかにつれくならんと (二七四・6・309)
上の詞につくくとなかめふし給とあるより姫君の事
をもおもひ出し給ふ也八五五オV
- 33 桜のみへかさね (二七四・7・309) 問云檜扇の両の端三
まいつゝをつゝむと云々三まいかさねてつゝむにや
二三枚を別々ニつゝむ也一勸
- 34 こきかたに (二七四・8・309) 紫にてこく色とりたる方
也
- 35 めなれたれとゆへなつかしう (二七四・8・309) 常の物
をも故なつかしうもちなしたると也人のこゝろつかひ
みゆへきこと也

- 36 やはらかにぬる夜はなくて (二七五 6・310) 貫河催
馬楽花の儀如何只葵の上の打とけぬ心はかりしるへき
(か朱) (と朱)
- 歌
37 四代をなんみ侍り (二七五 7・310) たゞ久しく代ニつ
かへたるといふ心也
- 38 文ともきやうさくに (二七五 8・310) ほめたる詞也を
しはかる事もいふ詞也
- 39 くはしうしろしめしとゝのへさせ給へる (二七五 9・
310) 源のよくめしとゝのへくると也入五五ウV
(給へ)
- 40 そしうなる (二七五 12・310) 奸かたむ心也朝にも出つ
かへぬものゝ中に上手などをたつね出給ふ
(出)
- へると也
- 41 よろつの事よりは柳花苑 (二七五 12・310) 左大臣方の
事をほめ給ふあへしらい也
- 42 ましてさかゆく春に (二七五 13・310) まして左大臣の
舞給くましかはさかへたる代の面目なるへしと大やけ
の御方になりての給ふ也
- 43 弁中将 (二七五 14・310) 左大臣息也或本中将の弁とあ
り兩人にや
- 44 弓のけち (二七六 6・311) 踏哥後宴也弓をいる事あり
- 45 ほかのちりなんとやをしへられたりけん (二七六 7・
311) 本哥の心も後そさかましとをしへたるをもて書た
る詞也
(二朱) (と朱)
- 46 宮たちの御もきの日 (二七六 9・311) 弘徽殿御腹の女
宮たちの右大臣家入五六オVにてありし也
(御腹)
- 47 したりかほなりやとわらはせ給 (二七六 14・311) 右府
の哥にわかやとの花をほめたるやうなるをわらはせま
します也哥を人の方へつかはす事故実あるへき事也
哥の心は源氏君を賞翫の心なるへし
- 48 女みこたちなともおひいつる所なれば (二七七 1・
311) 源くのおとゝいの女宮達もおはす所なればなへて
(氏)
- のさまにはおもはしと源にをしへ給御詞也右府は源と
御中よからぬわたりなればかかなくさめ仰ある心也
- 49 桜のからのきくの御なをし (二七七 3・312) 花鳥
- 50 しりいとなくくひきて (二七七 3・312) 直衣ニ下かさ
ねして裾を引給ふ也
- 51 おほきみすかた (二七七 4・312) 親王の姿のやう也と
いふにて又云直衣姿を五六ウVいふ大人のすかたと
(やナシ) (と)

ほめたる詞也

52 袖口なとたうかのおり(二七七10・312) 踏哥の時の出しきぬなどのことくことさらめきたりとよろしからずおもひ給ふ也

ナレ
袖口一勸とは簾の下より女房のきぬの袖をいたす事也いまの世にも大饗など晴の儀式のときはいたしきぬあり又車よりも袖をはいたす也

53 そらたきものいとけふたう(二七八1・313) 空たきのみさまざましからぬ世巻くとこ夏の巻ニもみゆ

54 あふきをとられて(二七八5・313) 石川河催馬楽詞をもて口号奉(す)またまへり一勸石河は賀茂名所之歎云々

55 心いるかたならませは(二七八12・313) ふかく心に入たる事ならはたつねまとはさらましと也よめりハ五七オV

56 うれしき物から(二七八13・313) 尋あひたるはうれしけれとも女の返ことすへきことナレのさまは不可然ナレと思給心あれはものからといひのこしたり是又源氏の性也花鳥の説も其故有にや五六の間末分明云々此外又心ありいづれもおもしろき歎此時のさまうれしけれともなをあちきなく物思ひくなるへき心をこめてものからといへるにや云々有感にや

57 へ三ノ口く事(二七一4・305) 一答弘徽殿ノ東ニワタ

リ廊リソレアタル戸ナレクル、ヲサシタル戸ナレソトノヘイツル所ニヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

所三アリ南第三ニアタル戸クル、ヲサシタル戸也三ハ声ニヨムヘシ速哥連ナトニミツノ戸口ト云モ道理ハタカハヌ也

今案北の廊登花殿ヘトヲル廊ナルヘシハ五七ウV

葵

卷の名哥をもて号す人のかさせる葵故と源内侍かよめる也賀茂の祭の事を詮とする故也此春は花宴卷卷の後之年の事より次年の正月初までの事あり源氏廿一歳より

の事也花宴卷と此卷との間ニ朱雀院に内位を讓給て御即位大掌マア会等の事あるへし齋宮ト定齋院御御殿契ナレクニテ可勸之云々

1 世中かはりて(二八三1・317) 桐壺御門御位を去給事也

2 御身のやんことなさもそふにや(二八三1・317) 源氏の君大将ニ任し給事也此詞より大将とみえたり大将榮花卅九ニハ三位中将宰相にならせ給て大将かけさせ給つさいし

やうの大將ときこえさするいとめてたくいまめかし後
の^{ナシ}八五八オV二条関白師道 長保四三廿七任^{ナシ}參木同四
月三日兼左大將

3 我につれなき人の御心を(二八三三・317) 藤壺女御の
事也

4 たゝ人のやうにてそひおはします(二八三四・317)

桐壺御門位をさり給て御いとまある故ニ藤壺とそひお
^{御在す}はします也

5 いま後は(二八三四・317) 弘徽殿女御の后に立給とみ
ゆ朱雀院の御位につかせ給へは皇太后なるへし花

6 まことやかかの(二八三九・317) 記者の詞也きゝをよふ
事のやうニかけり

森

一

郎

7 齋宮にる給しかは(二八三三・317) 秋好の事也齋宮は^花

^{御代}源氏ニ一度立かはらせ給云々朱雀院御位につかせ給て
齋宮の卜定ありしとみるへし此卷より一年さきの年定

まりたりとみゆ卜定あり八五八ウVてより三年めにく
たり給へき也

8 人のためはちかましきことなく(二八四三・318)

桐御門の源氏ニをしへ給おやこゝろ也^{六ナシ}葵上ニ六条御息
所のものゝけになり給し事になへり

9 女も似けなき御年のほと(二八四八・318) 六御息所此

時廿九才也源氏廿一なれば也此次年御息所卅にていま
内をみ給くとあり

10 それにしたかひたるさまに(二八四九・318) 源氏の心

をいふ御息所のけしきに随ふやうにことかけてふかゝ
らぬを御息所はうらめしく思給也

11 權のひめ君は(二八四一・319) 桃園式部卿女也權の名
は帚木卷二人の話しより也

12 心くるしきさまの御こゝちに(二八五一・319)

^{ナシ}葵上懷妊之事八五九オV

13 そのころ齋院もおりる給て(二八五五・319)

此齋院たれともなし

14 后はらの女三宮る給ぬ(二八五五・319) 弘徽殿大后の^{ナシ}

御腹也

15 御禊の^{コレイナシ}かんたちめなとかすきたまりて(二八五九・

319) 齋院御禊の事先卜定ありて東河にてみそきありて
すくに初て齋院へ入給初齋院とは大内の大膳職或左近

府などを点してそれにて三年^{ナシ}潔齋の事ありその年の四
月ニ御社へ参給はんとて祭の前ニ吉日を撰て又御禊の
事あり則紫野の野宮に入給これを二度のはらひといふ
女三宮の御禊は野宮へ入給へき二度めの袂をいへりそ

の故は初度のほらひには勅使参議一人供奉す二度の禊には大納言中納言参木王下あまた供奉す延喜式等二見たりすへて十二人の八五九ウV勅使也是をかす定まるとはいへり源氏大将は参議二人の中たるへしされは此まきニいへるは二度の禊うたかひなし初度の禊く事は此卷ニみえざる也花鳥の説をもて大方しるすもの也

16 大宮きこしめして(二八六五・320)葵上母宮也

17 にはかにくらし仰給ひて(二八六六・320)車のたし所なき時分になへり

18 下すたれのさま(二八六九・320)女房のるには八葉の車にも下簾をかくる也花

19 かさみ(二八六〇・321)からきぬにもをきる事は下^{ものすそナシ}仕までもきる也かさみは童女のきる物也

20 榻事(二八七七・321)一勤女車ニハ榻を用ふのほりく^{シチ(朱)ナシ}たりのやすからんかため也見物ニハかきさらざる也

21 さくのくまにたに(二八七〇・322)ひのくま川にこまとめての哥をひきていへる也八六〇オV御息所のかたをはみやり給けしきもなきを影をたにみんともおほさぬにやと思なして心つくし給也源氏の何となくみやり給方もありしにや

22 影をのみみたらし川の(二八八二・322)御息所の源氏

をはほのくみ給へとも源氏はさもなき事をよめり

23 大将の御かりの隨身(二八八六・322)花かりそめの儀也近衛将監将曹府生を一人つゝかりに召わたしてつることをいふ也一員ともいふ地下の輩の事蔵人のそ

うとは殿上の蔵人の将監をいふそれを具する事は例なき事也又行幸の時は左右近衛将監将曹は本陣ニ供奉するに由て私の一員ニ召わたす事もかなはぬ也此一段の

詞心えか^{た(朱)}き事也花鳥^{ヒ(朱)}説如此 此事第一の難義也と花鳥にも

あり別ニ猶しるすへ八六〇ウVしく云々口伝云此物語の寓言之体と心うへし源氏大将をほめんために如此書

たるなるへし 禅閣之説^御

24 手をつくりて(二八八三・323)手を合ておかむ体也花司馬相如事ヲヒケリ不可及其儀欵

25 式部卿宮さしきにて(二八九四・323)桃園宮也^{ナシ}

26 神などはめもこそとめ給へと(二八九五・323)紅葉賀卷に弘徽殿女御のゝ給しは心かはりて是は源氏をほめてあやうく思給心也

27 ひめ君はとしころきこえわたり給(二八九五・323)

権ひめ君の心中也源氏の年来ねんころにきこえ給くに姫君の御心はとまりけるなるへし源氏のめてたさはか

うしもいかてとまてみえ給をみ給^ひくてなのめならん人なりともかくねんころなるニはなく^ひきもすへきことなるをまして源氏にはといふハ六一オV心也されともけちかくとはおほさぬは種の真なるしるし也

28 なをあたからおもりかにおはする人の(二八九〇・三二)

左大^臣殿^光の家風をのたまへり

29 齋宮のまたもとの宮に(二九〇・一・三二)花卜定ありて左衛門のつかさニ入給ふへきをさはる事有てまたもとの六条京極^の宮におはしますと也

一 郎 森

30 うきもん^のうへのはかま(二九〇・一〇・三二)花鳥ニ云^{ナシ}今案童女は晴の時は打袴のうへに表袴をきるうきもんは窠ニ霰也よのつねには上の袴をはきす打袴とはいひ^手きの袴也一勘

31 千^手いろともいかてか(二九一・三・三二)みちひるしほのとは源氏^ののさためなきをよめり紫^のく上やうくおとなひたる心也

32 あふきのつまをおりて(二九一・一〇・三二)檜扇のはしをおりたるにや哥^書を付たる歎ハ六一ウV

33 はかなしや(二九一・一一・三二)葵はあふと云心あり人にはあふ人とよめり神のゆるしを待^待けるとはけふの祭

(四四)

のたよりなどを待たる事を神のゆるしとよめりされとかひなしと也

34 しめのうちには(二九一・一一・三二)引哥未見可勘

35 かさしける心そあたにおも^ゆはやるやそうち人になへてあふ^{ライトヨムヘシ}ひを(二九一・一四・三二)源内侍ニあひ給し事をよめり八十氏人にとはあまたの人に逢ぬる人をとよみたまへり 後撰第四行かへる八十氏人^のに玉かつらかけてそたのむあふひてふ名を読人不知

36 くやくしくもかさしけるかな(二九二・二・三二)又内侍哥也

37 いとましからぬかさしあらそひかなとさうくしくおほせと(二九二・五・三二)此段聊心得かたし可付心

源内侍はおもなき人也さならぬ人もはたあひのり給ふにはくかりて事をもかはしかぬと也^{ナシ}ハ六一オV

38 つりするあまの(二九二・一一・三二)引哥

39 かすならぬ身をみまうく(二九二・一四・三二)源氏より六条御息への音信の詞也^{ナシ}

40 いきすたま(二九三・八・三二)生霊也又たの霊の事とも

41 二条^の君などはかりこそ(二九三・一三・三二)紫上のおさなき程を人知ねはかく疑と也妙也

42 たゞつくくくとねをのみなき(二九四3・329)ものゝ
けの体也

43 院よりも御とふらひ(二九四5・329)桐壺帝

44 かのとのにはさまてもおほしよらさりけり(二九四9
・329)人のうらむへき所をかへりみざる事悪事也

45 かゝる御ものおもひの乱に(二九四10・329)六御息事

46 ほかにかわたり給て御修法など(二九四11・329)神事ニ
(よ朱)
とて所をかへ給也

(ヒ朱)

47 いとゝ心さしそひぬへきとも(二九五5・330)ハ六二
ウV葵上懷妊事也

48 袖ぬるゝ恋路とかつは(二九五11・330)此哥ことによ
ろしき聞えあり

49 山の井の水も(二九五11・330)引哥くやしくぞ

50 いかにかそやもある世哉(二九五13・330)源氏心中也有
感也

51 袖のみぬるゝやいかにふかゝらぬ(二九五41・331)
山井によせたる詞也

52 おほろけにてやこの御返を(二九六2・331)

身つからまいりて御返をも申さぬ事ををこたり給詞也
おほろけならぬさるかたき折節なればと也

53 此御いきす玉故父おとゝの御らうなど(二九六4・331)

六御息の御靈歎又御息所の父の大臣の靈歎なとうたか
ひいふ也

54 いかき(二九六11・331)おそろしきん也 河辛 (後筆) (ママ) ナシ (イカキ)

55 身をすてゝや(二九六13・331)引哥身を捨ていにやし
にけんハ六三〇V

56 おもふもものを也(二九七4・332)引哥おもはしと一

57 齋宮は其年うちへ入給へかりしを(二九七5・332)
諸司ニ入給はん事也

58 二たひの御はらへ(二九七6・332)齋宮諸司ニ入給は
んとても又野宮にいり給はんとても東河にて御楔の事

ありこれを二度のはらへといふ也但群行の時のはらへ
は西河にてある事也花鳥

59 なみたのこほるゝさまを(二九八11・333)葵上ニ靈の
かはりて源氏を打まもり涙をこほす也

60 ふかきちきりある中はめぐりてもたえさなれば(二九
九1・334)親子の楔は一世といひならはしたれともい
まはなくさめたる詞也

61 歎わひそらにみたるゝ(二九九6・334)玉の出ぬるを

結ひとむる事あはればハ六三〇V也むすひとゝめよと
はうかるゝ心を本心にかへし給へとかこつ心にや

62 のちの事又いと心もとなし(三〇〇1・335)産以後の

ことともなるへし

63 うふやしなひとも夜ことに(三〇〇7・335) 三ヶ

夜五ヶ夜なとの事にや 接ウフヤシナヒ
左伝第二

64 御ゆる(三〇〇11・336)かみあらふ事也和抄

65 いとゝ御心かはりもまさり行(三〇〇14・336) 御息所
心ちの事にや

66 人の御ためいとおしう(三〇〇13・336) 源氏の心也

67 ことあひたるこゝちして(三〇〇17・336) 左大臣殿くよ

ろつのく事たらひたる時分なれば盈エイを欠く理にて葵上の

凶事出来たるなるへしこのハ六四オミテル物語はいつくも

此意あるへし

一 郎

68 常よりはめとゝめて(三〇〇33・338) 葵上の源氏を又
見給ましき先表也

69 秋のつかさ召(三〇〇33・338) 八月也春はあかためし

秋は司召といひかふる也一勅

70 きみたちもいたはりのそみ(三〇〇34・338) 左大臣の

息たち云々私シ緒家の人たちなるへき歎

71 とりへのにゐて奉る(三〇〇47・339) 葵上死去は十四

日夜也喪は廿日あまり也

72 もこよふことゝ(三〇〇412・340) 異本まとふ事と云々

(四六)

同心欵一文選第十二郭璞江賦云神蜺蠃輪以沈遊シヅカフ注云

神蜺蛇也蠃輪行貞 愚案モヨフハタ、ヨイアリク白

也此意心にて無子細欵永正七三注之 又日本記第二豊玉

姫化ニ為八尋ノ大熊フ鰐ノ 匍匐ヘイ透蛇モコヨフ 同文選之心永正八

ハ六四ウノ

73 人ひとりかあまたしもみ給はぬ(三〇〇14・340)

人ひとり欵とはゆふ顔の上の事也

74 八月廿日あまりの有明なれば空の気色も(三〇〇51・

340) 折から哀ふかゝるへし紫上ニ別給しとき此夜の月

の事を思出し給事あり

75 のほりぬるけふりはそれと(三〇〇54・340) 源氏独詠

し給ふ事也

76 にはめる御そ(三〇〇58・341) 本台の御衣也色服のうす

き也

77 かきりあればうすオみ衣(三〇〇511・341) 限あるとは

物忌令などの定あればさのみ深クもそめすと也紫上ニ

別給クし時此衣色のうすき事を云り

78 法界三昧一(三〇〇512・341) 普賢は法界ニあらゆる所

作を三昧とす観音は慈悲を三昧に住し給ふることし大

士は菩薩也三十七尊一聚合身普賢延命大願薩埵ハ六五

オV

79 なにゝ忍の (三〇五・14・341) 引哥結をく後撰ニあり子をみてよめる哥也

80 袖のうへの玉一 (三〇六・5・341) 本文無分明可尋又切なる心なるへし

81 うしとおもひしみにし世も (三〇六・10・342) 源氏心かゝるほたしとはゆふきりの事也

82 ときしもあれと (三〇六・14・342) 引哥秋やは人のわかるへき

83 身にもしみける哉 (三〇七・1・342) 吹よれば身にもしみける秋風を河海ニハ此哥ありいつれの哥にても心に通し哀のふかゝらんやよろしかるへき身にさむく秋のさよ風なともあはれなるへきにや

84 菊のけしきはめる (三〇七・3・342) ひらけさしたる体なるへし

85 これあをにひのかみ (三〇七・3・342) 花田ニ青けのま起しれる也服者の方への紙色也菊もなるへしハ六五ウV

86 きこえぬ程は (三〇七・4・432) 文詞也

87 人のよをあはれときくも (三〇七・6・342) 菊によそへたる也

88 たゝいまの空に (三〇七・6・342) 問給ふ事もいかゝと

思わつらひ給へとも也此御息所菊よろひにすくれたまへり

89 こよなうほとへ侍経にけるを (三〇七・13・343) 返事返しの詞也

90 とまる身も (三〇八・2・433) 一心をくらんとは御息所の物ものけなとに成給し心をほのめかし給也

91 御らんせすもやとてこれにもと (三〇八・3・343) 服者の方よりの文なれば御らんせぬ事もやとて此文にも思心を書くさぬよし也かこつけたる詞なるへし

92 前坊のおなしき御はらいく朱から (三〇八・6・343) 桐御門と朱と朱

と前坊と御兄弟なるよし此詞にてみゆハ六六オV

93 その御かはりにもやかて (三〇八・8・344) 六御息を前坊の後桐壺帝の内ニおはしまむせんとの給し事也

94 野の宮の御うつろひ (三〇八・13・344) 諸司より野宮へ入給事也

95 正日まではなをこもりおはす (三〇九・3・344) 四十九日まではこもりおはすと也御法事は引あけられたる歎

云々

96 三位中将 (三〇九・4・344) 頭中将也三位事此詞よりみゆ

97 かのいさよひのさやかならさりし (三〇九・八・345)

末摘巻にいさよひの月に頭中の源氏をみ頭はしたりし
常陸宮にての事也

98 秋の事など (三〇九・八・345) 末摘巻ニ常陸宮よりの後

朝に頭中の源氏をうたかひたてまつりてなをいとねふ
たけ也なとたはふれしナシときの事也此段かやうに分別せ
されはずへて心得かたしハ六六ウV

99 しくれうちして (三〇九・10・345) 又一段也上の詞の同
日の事とはみるへからず

100 中将の君にひ色のなをし (三〇九・10・345) 頭中将姉妹

の服を十月更衣の次ナシく色をうすくなす也鈍色直衣事
在花鳥

森 101 雨となり雲とやなりにけん (三〇九・14・345) 古事古詩

等 未見河海

102 ひもほかりを (三一〇・3・345) 花鳥説難用只しとけな
きすかたをすこしひきつくろひて直衣の入ひもほかり
をさし給へるなるへし

103 これはいますこしこまやかなる (三一〇・3・345) 軽服

三月也更衣もし給はぬよし也濃コマヤカなるは志の浅深によれ
り

104 紅のつやゝかなる (三一〇・4・345) 軽服に紅の絹を用

事例あり見花鳥下襲の事とみえたり 花鳥きぬの事歎如
何

105 ひとりことのやうなるを (三一〇・7・346) 頭中いもう
との事なれば也

106 みし人の雨と成にし (三一〇・8・346) 此哥尤哀也結句
等余情可思ハ六七オV

107 枯たる下草のなかに (三一〇・1・346) 此景殊勝也可見
I

108 句をとりてや (三一〇・3・346) 夕霧は大宮の孫なれば
葵上よりは次なるへき心也大宮への哥也

109 いまもみて (三一〇・7・347) かきはあれにしは葵上
のなくなりし事也

110 たえまとをけれと (三一〇・9・347) 源氏より権宮へ久
一日 ナシ

しく音信給はて文あれはれのけさうの文にやとおも
へともこの文を内くにてみしにやたゝ折節のあはれば
かりなる文なれば女房のはうもとかもあらしとて御覽せさ
する也それをきの物となりにたると云り

111 そらのいろしたる (三一〇・10・347) 是を服者もの用ル色
也

112 いつもしくれば (三一〇・12・347) 引哥

113 大内山を思やりきこえなから (三一〇・14・347) 両義あ

り花鳥ニは大内の事也大将の直盧大内ニありそれをおもひやる也云々ニ云亭子院ハ六七ウV仁和寺の大内山といふ所ニおはしますとき堤中納言兼輔勅使にてまいりて白雲の九重にたつ山なればとよみしことをおもひてと源氏のものさひしくこもりおはするによそへての給へる也此説々いづれにても云々

114 えやはとて (三一二・1・347) 引哥色ならはうつるばかりも心は思ほととをくえみせぬといふ心也

115 なにことにつけてもみまきりは (三一二・3・347) かの事を思給也六御息などのすくれ給へるも又いかにぞ思所ある事を下におもへることは也

116 つらき人しもそ (三一二・4・347) 権宮又は藤壺などの事をおもひての給也源氏につらき人也されとすくれたるは是等にこそはとなり引哥までもなしハ六八オV

117 なをゆへよしすきて (三一二・6・348) 六息などのたくひさまくおほしあつむる也

118 みぬ程うしろめたくいかくおもふらんと (三一二・8・348) 紫上いまた実事もなく物えんしなとなきほどの事也

119 中納言君 (三一二・11・348) 葵方の女房也

120 みなれく (三一二・14・348) みなれ木のー哥の心に

てかけり

121 火を打なかめ給へるまみの (三一二・5・349) 此詞妙

也 (云々如朱) 如見之

122 あこめ (三一二・9・349) 一禪柏也二も三もかさぬる物也

123 くはん草色のはかま (三一二・9・349) 萱草色は柑子色と大略同じ花鳥く委

124 おり知かほなるしくれ打そきて (三一二・3・350) 此段殊勝云々ハ六八ウV

125 すこしひまありつる袖とも (三一二・4・350) 此時のさまおもひやるへし四十九日なと過てすこし歎しひまあるやうなるニ今源氏君のいて給おりふしのあはれいかくあさからん書様妙也

126 院におほつかなかりの給はするに (三一二・4・350) 源氏の詞

127 おとくひさしうためらひ給て (三一二・5・351) 涙にむせひたるていなと妙也

128 院にも (三一二・5・351) をしはからせ給てんと源氏又御門御心をしはかりの給也

129 おほしすつましき人も (三一二・13・352) 左大臣の詞也

女房たちにおほせて我心中をの給なるへし私夕霧の事をの給歎

130 いとあさはかなる人^くの (三一六四・352) 源氏の返答也^{ハ六九オ} V

131 中^くいまは何をたのみてか (三一六六・352) 葵上のおはせし程は油断の心にてと絶もありしといふ心也

132 うつせみのむなしき心ちそし給 (三一六八・352) 葵上もうせ給源氏もたち出給ぬる^跡とはた^跡せみのもぬけたりしからをみるやう也となり

133 ふるき枕古き衾 (三一六三・353) 長恨哥唐本には多分^{翡翠瓦冷霜花重^{ナシ}}翡翠衾寒誰与共^{ナシ}あり旧枕古衾とあるは和本の儀にやおほつかなし私云古文真宝所載翡翠衾寒^{ナシ}云々白氏文集第十二唐本引勘之処旧枕故衾誰与共云々尤叶源氏之心也永正七^{ナシ}七三記之

134 霜の花しろし (三一七一・353) 私^しし^し重^し字^也をもしとあるを白しとかきかへたり如此事所^{ナシ}にあり^{ハ六九ウ} V

135 一日のはなるへし (三一七三・353) 上の詞ニ枯たる下草の中ニりうたんでしこなとありし時の花也といへり哥は床夏を床に用ル心也長恨哥の別の心あり

136 宮に御覽せさせ給て (三一七四・353) 大宮に左府のみせ給也

137 殿のおほしの給はするやうに (三一七三・354) 左大臣のことはやうにおほしすつましき人もとまり給へればなとの給し事を人^くのいふにや

又源氏のおさなき人をみすてすと人^くにの給し事を思にやいづれにても云^く

138 中宮の御かたに (三一八四・354) 藤壺宮御方へ也

139 おもひつきせぬ (三一八五・354) ひき哥までもなし

140 つねなき世は大かにも (三一八六・354) 源氏返答也

ハ七〇オ V

141 けふまでけふまでもとて (三一八八・355) 此詞幽玄也なからふるなといふこゝろをこめたり

142 むものうへの御そ (三一八九・355) 無文の袍は夏^{ナシ}

穀^{アコメ}平絹色は常の袍のことし冠も無文卷纓服者のさたまれるいてたち也花問云無文ノ冠其様如何一答常の冠は有文ノ羅也服者は無文ノ羅ノ用也

143 われも^くとさうそきけさうし (三一八三・355) 源氏の意也か^心る所をみ給につけても葵上方にとまりし人^人^くを^くおもひやり給ふ也

144 いなみくしたりし (三一八四・355) すまざる体になや私居並歎

- 145 御さうそくたてまつりかへて(三一九一・355)
服衣をかへ給しにや
- 146 しはしことかたにやすらひて(三一九九・356) 二条院
の内東対となるへしうちやすみなとし給ふにやナシハ七
〇ウV
- 147 中将の君といふに御あしなとまいり(三一九三・356)
たれともなし本東対にて御あしきすらせ給也
- 148 君はわたり給とて(三二〇一・357) 源氏のわか御かた
へ也
- 149 こなたはかりにおかしけなる(三二一四・358) 紫上は
かりへにまいらせけるにや
- 150 あすのくれに(三二二三・358) 新枕の三ヶ夜めのもち
るの事をの給ふ
- 151 けふはいまくしき日也(三二二三・583) 当座のまき
らはしにの給なるへし
- 152 日えりして(三二二五・359) 是も惟光とり合て申す詞ナシ
也いまくしき日との給しをうけて申也
- 153 子のこはいくつか(三二二五・359) 亥日の翌日の事な
れはかくいふ也
一数定云々源氏さたかならぬ程ニおほめき問也
- 154 みつか一にてもあらんむ(三二二六・359) 三歌一にても
とよむひ説ありと此段三ヶ大事の一也口伝在別ハ七一
オV
- 155 むすめの弁といふ(三二二三・359) 少納言か女也
- 156 かうのくのはこ(三二二四・359) 香壺ニ厘はさたまれる調ナシ
度也マ円角なる管也梅かえの巻にしるすへ候一禪こも
しにこる
- 157 あなかしこあたになかとか不用之あなたなといへは(三二三一・360) 人々に
しらすなといふ心也
- 158 あたなることはまたならはぬ(三二三一・360) もらさ
しと也
- 159 したしきかきりの人く(三二三五・360) ちかくつか
ふうまつる人く也
- 160 夜をやへたてんと(三二三三・361) 引哥若草の新手枕
を
- 161 いま後はみくしけ殿(三二四一・361) 臈月夜御連匣殿に
なり給云々一勤云大臣の女なる職也
- 162 いとにくしとおもひきこえ給て(三二四四・361) 弘后
の心也

163 君もをしなへてのさまには(三二四5・361) 源氏の心

164 なれはまさらぬ(三二五5・362) 引哥

165 としもかへりぬ(三二五5・362) 源氏廿二歳ニ成給

△七一ウV

166 みそかけ(三二五14・363) あまたかけ也

167 春やきぬるとも(三二六7・354) 引哥六語河あたらしき此哥

相当とちなし如何祝の心を給也云々只の春の初ニみ
えまいらせんの心はかりにてもあるへき歎

168 ちゝおとゝの御りやう(二九六4・331) 具平親王宇

一 治関白靈氣ニ出給事菜花物語第十二ニアリ

169 一あくかれかたきこゝろならひに(三一七1・353)

源氏君のこの床をあくかれ出出かたき心ならひに亡魂
をおもへる也△七二オV

付記

伊井春樹氏の翻刻の「凡例」中より若干摘記すれば
次のごとくである。

1 本文を引用している各項目の下に、読解の便を考
えて、源氏物語大成の頁行数を、更に日本古典文学
大系本(岩波書店)の頁数を付した。

例、帯木 14 えんすれば(三六12・57)

上段の(三六12)は源氏物語大成の頁行数を表わし
下段の(57)は日本古典文学大系本の頁数を示して
いる。

2 原本の書入れ、見せ消ち、朱筆による校合は、そ
れぞれ(後筆)、(ヒ)または(ッ)、(朱)として
示した。しかし朱による多くの合点は、煩瑣になる
ことを避けるため、一切省略した。

3 欄外になされた書入れの注記は、該当箇所下部に
枠で囲んで△頭書Vとして示した。